

茨城県教育財団文化財調査報告第298集

新 畑 遺 跡

都市計画道路須賀佐田線街路改良事業地内
埋 蔵 文 化 財 調 査 報 告 書

平成 20 年 3 月

茨城県潮来土木事務所
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第298集

しん ばた
新 畑 遺 跡

都市計画道路須賀佐田線街路改良事業地内
埋 蔵 文 化 財 調 査 報 告 書

平成 20 年 3 月

茨城県潮来土木事務所
財団法人 茨城県教育財団

序

茨城県は、市町村や県の枠を越える広域的な交流と連携を進めるため、また、県土の均衡ある発展を支える基盤として、県土の骨格となる一般国道や主要地方道などの幹線道路網の整備を進めています。

このたび、茨城県潮来土木事務所は、鹿嶋市下塙地区において、都市計画道路須賀佐田線街路改良事業を計画しました。この事業予定地内には、埋蔵文化財包蔵地である新畑遺跡が所在します。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県潮来土木事務所から埋蔵文化財の発掘調査について委託を受け、平成18年6月から7月まで発掘調査を実施しました。

本書は、新畑遺跡の調査成果を取録したものです。学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深めるために活用されることによりまして、教育・文化の向上の一助となれば幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県潮来土木事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、鹿嶋市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し深く感謝申し上げます。

平成20年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 人 見 實 徳

例 言

- 1 本書は、茨城県潮来土木事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成18年度に発掘調査を実施した、茨城県鹿嶋市大字下埜886-6番地ほかに所在する新堀遺跡（しほり）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は、以下のとおりである。
調 査 平成18年6月1日～平成18年7月31日
整 理 平成19年10月1日～平成19年12月31日
- 3 発掘調査は、調査課長川井正一のもと、以下の者が担当した。
首席調査員兼班長 川又 清明
主任調査員 小松崎和治
主任調査員 井上 琢哉
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長村上和彦のもと、主任調査員井上琢哉が担当した。

凡 例

1 地区設定は、日本平面直角座標第K系座標を原点とし、X軸=-4,920m、Y軸=+72,400mの交点を基準点(A 1 a1)とした。この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらにこの大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、「A 1区」、「B 2区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3…0とし、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1区」、「B 2 b2区」のように呼称した。

2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構	SA-樁跡	SB-掘立柱建物跡	SD-堀跡・溝跡	SF-道路跡	SI-住居跡
	SK-土坑	P-ピット	K-攪乱		
遺物	P-土器	TP-拓本記録土器	DP-土製品	Q-石製品	M-金属製品
土層	K-攪乱				

3 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

4 遺構及び遺物実測図の掲載方法については次のとおりである。

(1) 遺構全体図は200分の1、各遺構の実測図は80分の1の縮尺で掲載することを基本とした。

(2) 遺物は原則として3分の1の縮尺で掲載した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

	焼土・赤彩・施釉		炉・火床面・被熱面
	黒色処理・硬化面		柱痕・煤
●	土器	○	土製品
□	石器・石製品	△	金属製品・古銭

5 遺構一覧表・遺物観察表の表記については、次のとおりである。

(1) 計測値の単位は、m・cm、kg・gである。なお、現存値は()で、推定値は[]を付して示した。

(2) 備考の欄は、残存率や写真図版番号等、その他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号については、土器、拓本のみ記載の土器、土製品、石器・石製品、金属製品・古銭ごとに通し番号とし、本文・挿図・写真図版を記した番号も同一である。

6 「主軸」は、炉または竈をもつ住居跡については炉または竈を通る軸線を主軸とし、その他の遺構については長軸・長径を主軸とみなした。主軸方向は、軸線が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で示した(例N-10°-E)。

抄 録

ふりがな	しんばたいせき							
書名	新畑遺跡							
副書名	都市計画道路須賀佐田線街路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第298集							
著者名	井上琢哉							
編集機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL029-225-6587							
発行日	2008(平成20)年3月24日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
新畑遺跡	所在地							
新畑遺跡	茨城県鹿嶋市大字下 須賀佐田線街路改良 事業地 886-6番地ほか	08222 - 038	35度 57分 09秒	140度 38分 12秒	29 - 31m	20060601 - 20060731	2,286㎡	都市計画道路須賀佐田線街路改良事業に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
新畑遺跡	集落跡	古墳	竪穴住居跡 土坑	2軒 2基	土師器(坏, 甕)		第1号堀跡には、土構状の掘り残し部分がある。	
		平安末 - 中世初頭	竪立柱建物跡	5棟	縄文土器(深鉢), 土師器(坏, 椀, 高台付坏, 甕), 須恵器(坏, 高台付坏, 壺, 甕, 甕)			
			溝跡	1条	土師質土器(椀, 小皿, 高台付小皿, 内耳鍋), 陶器(皿, 鉢, 甕), 磁器(皿)			
	遺跡跡		3条	土師質土器(椀, 小皿, 高台付小皿, 内耳鍋), 陶器(皿, 鉢, 甕), 磁器(皿), 土製品(土鏡), 石器(火打石, 砥石, 浮子), 金属器(釘, 鉄), 古銭, 鉄滓				
その他	中世	段切り状遺構	1か所	土師器(坏, 高台付坏, 甕), 須恵器(坏, 甕), 土師質土器(小皿, 内耳鍋, 茶釜), 陶器(皿, 甕), 石器(石臼, 砥石, 瓦(平瓦))				
	時期不明	竪立柱建物跡	2棟	土師器(坏, 高台付坏, 甕), 土師質土器(小皿, 内耳鍋), 陶器(器種不明), 鉄滓				
要約	当遺跡は、古墳時代から中世にかけての複合遺跡である。第1号堀跡の西寄りには土構状の掘り残しがあり、その上には竪立柱建物跡と溝跡がある。第1号堀跡は方形居館などの区画に伴う堀の可能性がある。竪立柱建物跡は堀を横断する場所に設けられた門などの施設と考えられる。							

目 次

序	
例言	
凡例	
抄録	
目次	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 基本層序	7
第3節 遺構と遺物	8
1 古墳時代の遺構と遺物	
(1) 竪穴住居跡	8
(2) 土坑	11
2 平安時代末から中世初頭の遺構と遺物	
(1) 掘立柱建物跡	14
(2) 堀跡	20
(3) 溝跡	26
(4) 道路跡	28
(5) 柵跡	29
3 中世の遺構と遺物	
段切り状遺構	31
4 その他の遺構と遺物	
(1) 掘立柱建物跡	36
(2) 溝跡	38
(3) 土坑	39
(4) ビット群	42
(5) 遺構外出土遺物	44
第4節 まとめ	45
写真図版	

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

茨城県潮来土木事務所は、鹿嶋市下堀地区において交通の円滑化を図るために都市計画道路須賀佐田線街路改良事業を進めている。

平成16年11月12日及び平成17年5月23日、茨城県潮来土木事務所長から茨城県教育委員会教育長に対して、都市計画道路須賀佐田線街路改良事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会した。

これを受けて茨城県教育委員会は、平成16年12月6日に現地踏査を、平成16年12月13日から16日及び平成17年6月28日に試掘調査を実施し、新畑遺跡の所在を確認した。平成17年1月5日及び平成17年7月21日、茨城県教育委員会教育長は茨城県潮来土木事務所長あてに、事業地内に新畑遺跡が所在する旨、及びその取扱いについて別途協議が必要である旨回答した。

平成17年8月31日、茨城県潮来土木事務所長は茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第94条の規定に基づき、土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、計画変更が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、平成17年9月22日、茨城県潮来土木事務所長に対して、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

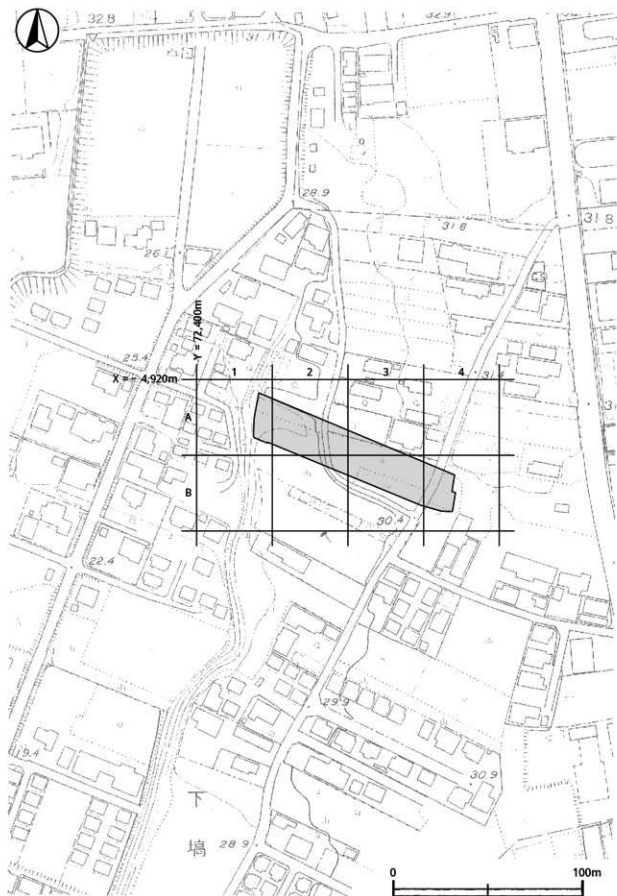
平成18年1月25日、茨城県潮来土木事務所長は茨城県教育委員会教育長に対して、都市計画道路須賀佐田線街路改良事業地内に係る埋蔵文化財発掘調査の実施について協議した。平成18年2月24日、茨城県教育委員会教育長は茨城県潮来土木事務所長に対して、新畑遺跡についての発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県潮来土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成18年6月1日から平成18年7月31日まで新畑遺跡の発掘調査をすることとなった。

第2節 調査経過

新畑遺跡の調査は、平成18年6月1日から平成18年7月31日まで実施した。以下、調査の経過については概要を表で記載する。

工程	期間	6月		7月	
		1	2	1	2
調査準備 表土除去 遺構確認					
遺構調査					
遺物洗浄 注記作業 写真整理					
補足調査					
撤収					



第1図 新畑遺跡調査区設定図

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

新畑遺跡は、茨城県鹿嶋市大字下城886-6番地ほかに所在している。

鹿嶋市は茨城県の南東部に位置し、東の太平洋と西の北浦に挟まれた南北に細長く延びる鹿島台地の南側半分ほどを占めている。鹿島台地の標高は40m前後で、南部に向かって標高が低くなる。台地の東部は海食崖が形成され急激な傾斜となっている。西部及び南部は北浦や鯉川に流入する中小河川とその支流によって開析されており、谷津や低地が入り込んだ複雑な地形を呈している。台地の東部、西部、南部それぞれの台地裾部には標高5m前後の低地が広がり、太平洋、北浦、鯉川に接している。

新畑遺跡は、鹿島台南端部に位置し、東西を谷津に挟まれた標高29~30mの舌状台地上の中央部に立地している。この舌状台地は当遺跡の西方及び南方約500mの位置で急激に落ち込んでおり、当遺跡からは台地裾部に広がる低地を挟んで鯉川を臨むことができる。現在の北浦及び鯉川は南北に細長い形状であるが、古くは霞ヶ浦も含めた内海であったことから、古北浦は当遺跡の近くまで広がっていたと考えられる。また、当遺跡の北方約2kmには鹿島神宮が位置している。

当遺跡の周辺は宅地及び畑地として利用されている。調査前の現況は畑地及び山林である。

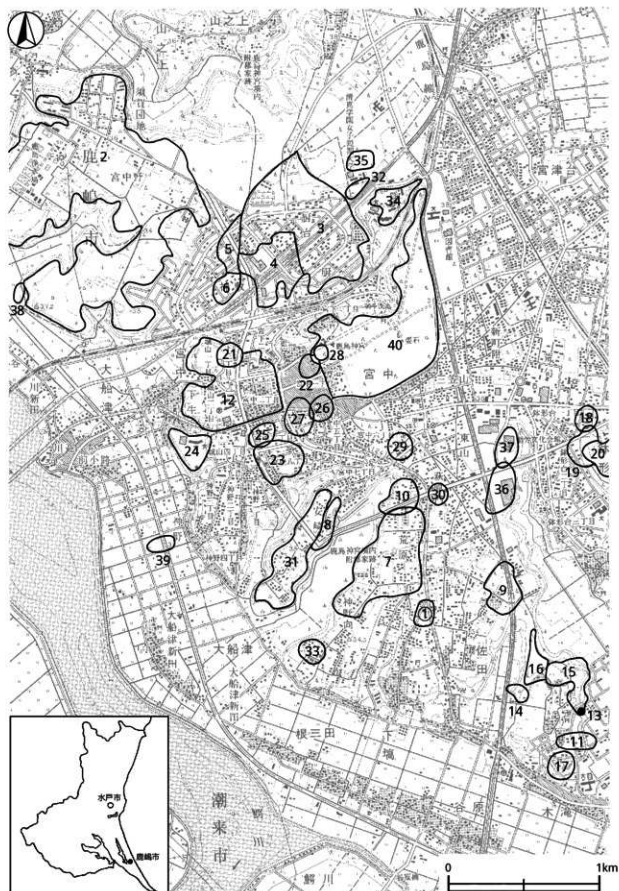
第2節 歴史的環境

当遺跡の所在する鹿島台地では、旧石器時代の遺跡から確認されており、古くから人々が生活するために適した場所であったことがうかがえる。特に鹿島神宮周辺の台地上には多くの遺跡が集中しており、鹿島神宮が古代より周辺地域の中核を担っていたといえる。ここでは、当遺跡周辺の主な遺跡について概観する。

当遺跡の北西約3.5kmの北浦を西方に臨む台地上には宮中野古墳群^{ミヤナカノコフナツル}2>が所在している。宮中野古墳群は前方後円墳20基、帆立貝式古墳2基、方墳3基、円墳99基と総数124基もの古墳で構成されており、古墳築造時期は5世紀から8世紀の間とされている。これらの古墳は、夫婦塚古墳と大塚古墳を中心とする一群、お伊勢山古墳を中心とするお伊勢山古墳群、3段築造の方墳を中心とする天神林古墳群、長方墳である千年塚を中心とする鶴来古墳群の4群に大きく分けることができる。このうち、鹿嶋市指定史跡の夫婦塚古墳は全長110mの前方後円墳で、茨城県内5位の規模である。また、大塚古墳は全長92mの帆立貝式古墳で、横口式石柵内からは銀製刀子柄頭や銀象嵌のある柄頭などが出土している。さらに、お伊勢山古墳は全長96mの前方後円墳である¹⁾。

当遺跡の北西約2.5kmの厨台遺跡群^{クタイ}は、鹿島神宮北側の谷津を挟んだ対岸の台地上に広がっている。当遺跡群は、厨台遺跡<3>をはじめ、鍛冶台遺跡<4>、片野遺跡<5>、円龍台遺跡<6>などの遺跡を含めた総称であり、当遺跡群の調査は1986年から断続的に行なわれている。これまでの調査では、縄文時代早期から近世までの遺構が重複して確認されており、中心となる時期は鹿島郡衙が機能している時期とほぼ同じである。遺物も多数出土しており、鹿島神宮や鹿島郡衙との関連が示唆される「鹿嶋郷長」、「神厨」の墨書土器が出土している²⁾。

昭和61年に国指定史跡となった鹿島郡衙跡である神野向遺跡<7>は、当遺跡の北方約500mに位置し、昭



第2図 新畑遺跡周辺遺跡分布図(国土地理院「潮来」,「常陸鹿嶋」,1:25,000)

表1 新畑遺跡周辺遺跡一覧表

番 号	遺 跡 名	時 代						番 号	遺 跡 名	時 代						
		旧 石 器	縄 文 文	弥 生	古 墳	奈 ・ 平	中 世			近 世	旧 石 器	縄 文 文	弥 生	古 墳	奈 ・ 平	中 世
①	新 畑 遺 跡				○	○	○	21	祝 詞 遺 跡				○	○	○	○
2	宮中野古墳群				○			22	大 町 遺 跡						○	○
3	厨 台 遺 跡	○	○	○	○	○	○	23	殿 坪・国主遺跡	○		○	○			
4	鍛 冶 台 遺 跡	○	○	○	○	○	○	24	根 畑 遺 跡	○		○	○	○		
5	片 野 遺 跡	○	○	○	○	○	○	25	新 町 遺 跡	○		○	○	○	○	○
6	円 籠 台 遺 跡	○	○	○	○	○	○	26	角 内 遺 跡					○	○	○
7	神 野 向 遺 跡	○	○	○	○	○	○	27	道 祖 神 前 遺 跡					○		
8	御 園 生 遺 跡			○	○	○		28	鹿 島 神 宮 境 内 遺 跡				○			
9	春 内 遺 跡			○	○	○		29	三 明 神 遺 跡					○		
10	片 岡 遺 跡		○	○	○	○		30	萩 原 内 遺 跡	○			○			
11	比 屋 久 内 遺 跡					○		31	安 崎 遺 跡	○		○				
12	鹿 島 城 跡			○	○	○	○	32	御 山 塚 群						○	
13	桜 山 古 墳				○			33	神 野 向 塚 群						○	
14	国 神 古 墳 群				○			34	伏 見 遺 跡	○	○	○	○	○		
15	北 台 遺 跡		○		○			35	中 町 附 遺 跡	○				○		
16	国 神 遺 跡		○	○	○	○	○	36	西 谷 A 遺 跡					○		
17	稲 荷 台 遺 跡	○	○	○	○	○		37	東 山 遺 跡	○				○		
18	鎗 不 入 遺 跡	○			○	○		38	爪 木 古 墳 群					○		
19	中 山 遺 跡					○		39	湖 岸 水 田 遺 跡					○	○	○
20	鹿 島 神 宮 寺 跡 1 期					○		40	鹿 島 神 宮							

和54年から断続的に調査が続けられている。これまでの調査で、一辺、約53mの回廊によって囲まれた政庁域や正倉院の範囲、官衙付属建物群などが確認されている。遺物では「鹿嶋郡厨」の墨書土器や銅印「福」など重要な資料も出土している³⁾。また、当遺跡北側の谷津を挟んだ対岸の台地上には御園生遺跡<8>が位置しており、鹿嶋郡衙成立期にあたる8世紀代の住居跡が多く確認され、鹿嶋郡衙との密接な関連が想定されている⁴⁾。

新畑遺跡周辺には製鉄関連遺構が多いことも特徴的である。春内遺跡<9>では連房式鍛冶工房跡1棟と堅穴工房跡18棟が、片岡遺跡<10>では連房式鍛冶工房跡2棟と堅穴工房跡7棟がそれぞれ確認されており、鹿嶋郡衙とはほぼ同じ時期に位置付けられている。また、比屋久内遺跡<11>では、9世紀後半から10世紀にかけての登り窯状あるいは半地下式と推定されている製鉄炉が検出されている⁵⁾。

中世の城郭跡としては、鹿島氏の居城であった鹿島城跡<12>がある。鹿島氏は常陸大掾氏の一族で、吉田清幹の三男成幹が鹿島三郎と称して鹿嶋郡を支配したことに始まる。養和元年(1181年)、成幹の子政幹が源頼朝から惣追捕使、さらに惣大行事に任命されたことによって鹿嶋神宮との関係を深め、天正19年(1591年)に佐竹氏に滅ぼされるまでの約400年間、鹿嶋郡域の支配を続けることになる⁶⁾。鹿島城跡は、昭和55年から数回に渡り部分的に調査が行なわれている。これまでの調査では、堀跡や地下式坑、掘立住建物跡などが確認され、地鎮具と考えられる輪土土板や輪宝墨書土器が出土している⁷⁾。

※文中の〈 〉内の番号は、第1図及び周辺遺跡一覧表の該当番号と同じである。

註

- 1) 石橋美和子・小澤竹博・小田代昭丸『鹿嶋市内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書27 鹿嶋市内№96遺跡(鹿島道南遺跡)宮中野古墳群分布調査』『鹿嶋市の文化財』第120集 茨城県鹿嶋市教育委員会 2006年3月
- 2) 石橋美和子・小田代昭丸・岩松和光・宇佐美義春・風間和秀『鹿島神宮駅北部埋蔵文化財調査報告XⅤ土地区画整理事業に伴う発掘調査 LR20調査区(厨台№23遺跡)』『鹿嶋市の文化財』第112集 鹿嶋市文化スポーツ振興事業団 2002年3月
- 3) 石橋美和子・風間和秀『神野向遺跡 都市計画道路3・3・9須賀佐田線(鹿嶋市宮中地内)街路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書』『鹿嶋市の文化財』第117集 鹿嶋市文化スポーツ振興事業団 2005年3月
- 4) a 小田代昭丸『御園生遺跡発掘調査報告書Ⅰ 都市計画街路3・3・10号線第3工区』『鹿嶋市の文化財』第101集 鹿嶋市文化スポーツ振興事業団 1997年2月
b 荒井保雄・成島一也『御園生遺跡 国補築道第14-08-241-0-050号埋蔵文化財調査報告書』『茨城県教育財団文化財調査報告』第200集 2003年3月
- 5) a 風間和秀・宮崎美和子『春内遺跡 一般国道124号線バイパス建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書』『鹿嶋市の文化財』第89集 鹿嶋町文化スポーツ振興事業団 1995年3月
b 宮崎美和子『鹿嶋町内遺跡発掘調査報告XⅤ 鹿嶋町内№72遺跡(片岡遺跡KT72)鹿嶋町内№73遺跡(片岡遺跡KT73)』『鹿嶋市の文化財』第90集 茨城県鹿嶋町教育委員会 1995年3月
c 小田代昭丸・宮崎美和子『鹿嶋市内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書17 鹿嶋市内№74遺跡(KT74)片岡遺跡 鹿嶋市内№75遺跡(KT75)片岡遺跡』『鹿嶋市の文化財』第95集 茨城県鹿嶋市教育委員会 1996年3月
d 田口崇『鹿嶋町内遺跡発掘調査報告Ⅴ』『鹿嶋町の文化財』第35集 鹿嶋町教育委員会 1984年3月
- 6) 『鹿島中世回廊 古文書にたどる朝朝から家康への時代』鹿嶋町文化スポーツ振興事業団 1992年3月
- 7) a 橋本久雄『鹿島城跡発掘調査報告書Ⅱ 鹿島城山公園整備事業に伴う発掘調査』『鹿嶋町の文化財』第34集 鹿嶋町遺跡保護調査会 1990年1月
b 田口崇・宮崎美和子・小田代昭丸『鹿嶋町内遺跡発掘調査報告XⅡ』『鹿嶋町の文化財』第70集 茨城県鹿嶋町教育委員会 1991年3月
c 岩松和光・桑田崇『鹿島城跡Ⅴ 鹿島商工会館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査』『鹿嶋市の文化財』第108集 鹿嶋市文化スポーツ振興事業団 2000年3月
d 石橋美和子『鹿島城跡Ⅵ 国補急傾斜第17-05-099-0-051号埋蔵文化財発掘調査業務委託 鹿島城跡測量・確認調査報告書』『鹿嶋市の文化財』第119集 鹿嶋市文化スポーツ振興事業団 2006年2月

参考文献

- ・茨城県教育庁文化課編『茨城県遺跡地図』茨城県教育委員会 2001年3月
- ・植田敏雄監修『図説 鹿行の歴史』『茨城県の歴史シリーズ』郷土出版社 2003年10月

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

新畑遺跡は、鹿嶋市の南西部に位置する標高30mほどの舌状台地中央部に立地している。調査前の現況は畑地及び山林であり、調査面積は2,286㎡である。

確認された遺構は、古墳時代の竪穴住居跡2軒、土坑2基、古代末から中世初めにかけての掘立柱建物跡5棟、堀跡1条、溝跡3条、道路跡1条、柵跡1列、中世の段切り状遺構のほか、時期不明の掘立柱建物跡2棟、溝跡2条、土坑7基、ピット群2か所である。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に12箱出土している。主な遺物は、土師器（杯、高台付杯、碗、甕）、須恵器（杯、高台付杯、盤、甕、壺）、土師質土器（碗、小皿、高台付小皿、内耳鍋、茶釜）、陶器（皿、鉢、片口鉢、甕）、磁器（皿）、土製品（土鍾）、瓦（平瓦）、石器（砥石、浮子、紡錘車、火打石）、金属製品（釘、鉄、古銭）、鉄滓などである。

第2節 基本層序

調査区南西部のA3J2区にテストピットを設定し、基本土層の堆積状況の観察を行った。テストピットの地表面の標高は29.5mで、地表から約2.2m掘り下げた。土層は13層に分層され、観察結果は以下のとおりである。

第1層は、黒褐色を呈する表土層で、ロームブロックを少量、炭化物・焼土粒子を微量含んでいる。粘性・締まりともに弱い。層厚は23～37cmである。

第2層は、明褐色を呈するソフトローム層で、粘性・締まりともに強い。耕作による削平を受けており、層厚は4～18cmである。

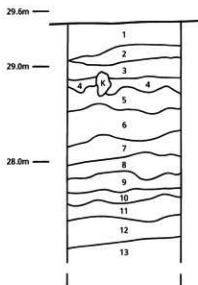
第3層は、明褐色を呈するハードローム層で、黒色粒子を微量含んでいる。粘性は強く、締まりは特に強い。層厚は22～34cmである。

第4層は、褐色を呈するハードローム層で、赤色粒子・黒色粒子を微量含んでいる。粘性は強く、締まりは特に強い。層厚は7～17cmである。

第5層は、褐色を呈するハードローム層で、白色粒子・赤色粒子・黒色粒子を微量含んでいる。粘性は強く、締まりは特に強い。層厚は10～25cmである。

第6層は、褐色を呈するハードローム層で、赤色粒子・黒色粒子を微量含んでおり、クラックが発達している。粘性は強く、締まりは特に強い。層厚は24～46cmである。

第7層は、暗褐色を呈するハードローム層で、黒色粒子を少量、赤色粒子を微量含んでいる。粘性は強く、締まりは特に強い。層厚は10～30cmである。第2黒色帯の下層と



第3図 基本土層図

考えられる。

第8層は、褐色を呈するハードローム層で、白色粒子・赤色粒子・黒色粒子を微量含んでいる。粘性は強く、締まりは特に強い。層厚は14～30cmである。

第9層は、褐色を呈するハードローム層で、白色粒子・赤色粒子を微量含んでいる。粘性は強く、締まりは特に強い。層厚は8～22cmである。

第10層は、褐色を呈するハードローム層で、細礫・砂粒・白色粒子を微量含んでいる。粘性は強く、締まりは特に強い。層厚は5～14cmである。

第11層は、褐色を呈するハードローム層で、砂粒を少量、白色粒子を微量含んでいる。粘性は強く、締まりは特に強い。層厚は14～23cmである。

第12層は、明褐色を呈する砂層で、砂層純層の漸移層である。ローム粒子を多量、白色粒子・赤色粒子を微量含んでいる。粘性・締まりともに強い。層厚は30cm以上である。

第13層は、黄褐色を呈する砂層で、細礫を中量含んでいる。粘性は弱く、締まりは強い。下層が未掘のため、本来の層厚は不明である。

なお、遺構の多くは第2層上面で確認されている。

第3節 遺構と遺物

1 古墳時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、堅穴住居跡2軒および土坑2基が確認された。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 堅穴住居跡

第1号住居跡（第4図）

位置 調査1区中央部のA 2g2区、標高29.1mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第2号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北東部の半分ほどは、擾乱によって削平されている。確認できた東西幅は4.9m、南北幅は3.9mで、主軸方向はN-10°-Wである。平面形は南西コーナー部が直角を成していることから、方形または長方形と推定される。壁高は10～14cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、P1から中央部東よりにかけて踏み固められている。壁溝が西壁と南壁の中央部を除く壁下に確認されている。

ビット P1は深さ24cmで、配置から出入り口施設に伴うビットと考えられる。

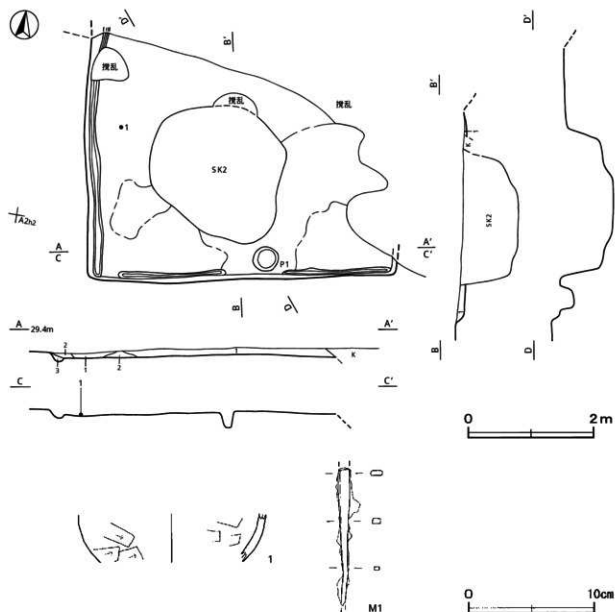
覆土 3層からなる。各層にはロームブロックが含まれ、ブロック状の堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

1 褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子 微量	2 褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
		3 褐色	ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片23点（坏7・高台付坏1・甕15）のほか、混入した須恵器片2点（甕）、金属器1点（鎌カ）、鉄滓2点、軽石1点が出土している。ほとんどの遺物は細片で、覆土中からの出土である。1は覆土下層からの出土であり、本跡が埋没する初期の段階に流れ込んだと推測される。M1は覆土中からの出土で、埋没過程で流れ込んだと考えられる。

所見 時期は、出土土器から古墳時代後期と考えられる。



第4図 第1号住居跡・出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表（第4図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	小型甕	-	(38)	-	長石・石英	に濃い橙	普通	体部外面へラ削り 内面ヘラナデ	覆土下層	5%

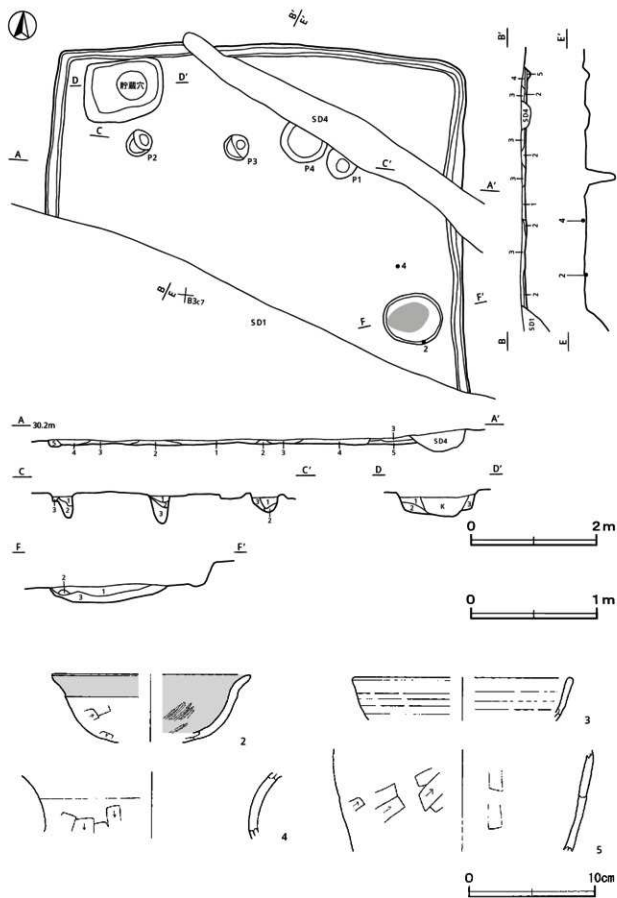
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M1	釘	(105)	0.9	0.4	(143)	鉄	断面長方形	覆土中	

第2号住居跡（第5図）

位置 調査2区中央部のB3b7区、標高30.0mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1号堀・第4号溝に掘り込まれている。

規模と形状 確認できた東西幅6.5m、南北幅は5.1mで、主軸方向は $N-4^{\circ}-W$ である。確認されたコーナ部分が直角であることから、平面形は方形または長方形と推定される。壁高は7~10cmで、わずかに外傾して立



第5图 第2号住居跡・出土遺物実測図

ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、踏み固められている部分は確認できなかった。確認されたすべての壁下に、壁溝が検出されている。

炉 東部南寄りに位置し、長径が95cm、短径が80cmの楕円形を呈している。地面を15cmほど掘り込んだ地床が、火床面は火により赤変し、わずかに硬化している。

炉土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量 3 赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子微量
2 赤褐色 焼土粒子中量、ロームブロック少量

ビット 4か所。P1～P3は深さ32～44cmで、配置から主柱穴と考えられる。P4は深さ8cmで、性格は不明である。

貯蔵穴 北西コーナー部に付設されており、中央部は攪乱を受けている。長軸1.3m、短軸1.0mの長方形を呈し、深さは40cmである。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。覆土は3層からなり、締まりがやや弱い層であることから人為堆積と考えられる。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量 3 暗褐色 ロームブロック少量
2 黒褐色 ロームブロック中量

覆土 5層からなる。ロームブロックを含む層が多く、不規則な堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 4 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子微量
2 褐色 ロームブロック少量 5 褐色 ロームブロック微量
3 暗褐色 焼土粒子少量、ロームブロック・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片125点(坯41・甕84)のほか、混入と考えられる須恵器片6点(坯2・甕1・蓋3)、鉄滓1点、瓦片2点(平瓦)も出土している。2は炉の覆土上層から、4は床面からそれぞれ出土しており、本跡が機能していた時期のものと考えられる。5は覆土下層からの出土で本跡が埋没した初期の段階に、3は覆土上層からの出土で本跡の埋没後に、それぞれ流れ込んだ可能性がある。

所見 時期は、住居跡の形状と出土土器から古墳時代中期後葉から後期前葉と考えられる。

第2号住居跡出土遺物観察表(第5図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴		出土位置	備考	
									口辺部ナデ	体部外面ヘラ削り			
2	土師器	坏	[15.6]	(5.4)	-	長石・石英	橙	普通	口辺部ナデ	体部外面ヘラ削り	内面ヘラ削り	炉上層	5%
3	土師器	坏	[17.2]	(3.4)	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	体部内外面クロナデ			覆土上層	5%
4	土師器	甕	-	(5.2)	-	長石・石英・ 鉄滓	明赤橙	普通	体部外面傾ナデ	体部下端ヘラ削り	内面ナデ	床面	5%
5	土師器	甕	-	(8.0)	-	長石・石英	橙	普通	体部外面ヘラ削り	内面ヘラナデ		覆土下層	5%

表2 古墳時代住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸・短軸)	器高 (cm)	深さ	内部施設						主な出土遺物	備考 (時期・否→前)	
							壁溝	主柱穴	出入口	ビット	貯蔵穴	炉			
1	A2g	N-16°-W	〔方形・ 長方形〕	(4.9) × (3.9)	10-14	平坦	←筋	-	1	-	-	-	人瓦	土師器	本跡→SK2
2	B3b7	N-4°-W	〔方形・ 長方形〕	6.5 × (5.1)	7-10	平坦	全周	3	-	1	1	炉	人瓦	土師器	本跡→SD1-4

(2) 土坑

第1号土坑(第6図)

位置 調査1区東部のA3j3区、標高29.6mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径0.9m、短径0.6mの楕円形で、深さは28cm、主軸方向はN-28°-Eである。底面はわずかにU字状を呈し、壁は外傾して立ち上がっている。

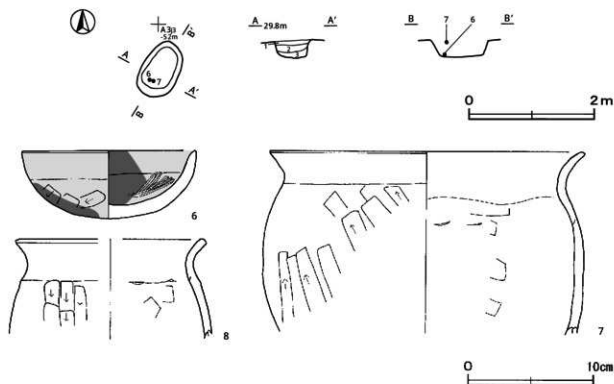
覆土 3層に分層される。第1層は自然堆積で、第2・3層はロームブロックの含有がやや多いことから人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子微量 3 暗褐色 ロームブロック中量
2 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片38点(坏17・甕21)のほか、混入と考えられる須恵器片1点(高盤カ)も出土している。6は底面から逆位で出土し、本跡を埋め戻す際に投棄された可能性がある。7は覆土上層、8は覆土中からそれぞれ出土した破片が接合したもので、本跡が埋没する過程で流れ込んだものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から古墳時代後期と考えられる。性格は不明である。



第6図 第1号土坑・出土遺物実測図

第1号土坑出土遺物観察表(第6図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
6	土師器	碗	137	5.5	-	長石・石英・ 鉄屑	橙	普通	□辺部織子デ 織子 凸部	体部外覆へラ削り 内面へラ	底面	95% PL4
7	土師器	甕	248	(14.3)	-	長石・石英	橙	普通	□辺部織子デ デ	体部外覆へラ削り 内面へラ	覆土上層	50% PL4
8	土師器	甕	(144)	(7.9)	-	長石・石英・ 鉄屑	明黄褐	普通	□辺部織子デ デ	体部外覆へラ削り 内面へラ	覆土中	5%

第2号土坑(第7図)

位置 調査1区中央部のA 2g2区、標高29.2mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1号堅穴住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径2.4m、短径2.1mの楕円形で、深さは95cm、主軸方向はN-51°-Wである。底面は階段状で中央部が深く、北西部と南東部の底面が20cmほど高くなっている。壁は外傾して立ち上がっている。

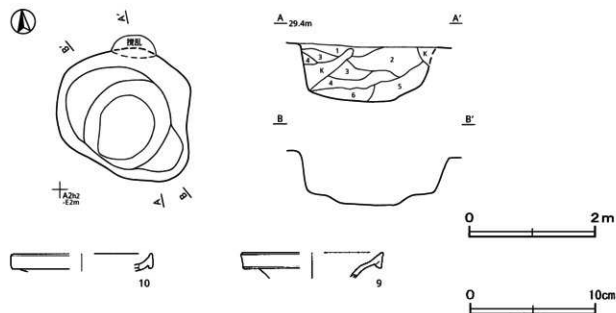
覆土 6層に分層される。炭化粒子やロームブロックを含む層が多く、不規則な堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子少量	4 暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	5 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	6 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片36点(坯10・甕26)、須恵器片10点(甕)のほか、不明鉄製品、鉄滓、瓦片(平瓦)各1点が覆土中から出土している。遺物の大半は細片で接合関係がないことから、埋没過程での混入あるいは流れ込んだ可能性がある。9・10はいずれも覆土中からの出土である。

所見 本跡の時期は、重複関係と出土遺物から古墳時代後期以降に構築され、平安時代には埋没していた可能性がある。性格は不明である。



第7図 第2号土坑・出土遺物実測図

第2号土坑出土遺物観察表(第7図)

番号	種別	種類	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
9	須恵器	長頸甕	[110]	(20)	-	長石・黒色粒子	灰	普通	内外面口クロナデ	覆土中	5%
10	須恵器	長頸甕	[10明]	(14)	-	長石	に5%黄緑	普通	内外面自然釉	覆土中	5%

表3 古墳時代時代土坑一覧表

番号	位置	長(軸) 径(方向)	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 (時期・古・新)
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(cm)					
1	A33	N-26°-E	楕円形	09×0.6	28	外傾	U字	人為	土師器	
2	A2g2	N-51°-W	楕円形	24×2.1	95	外傾	段状	人為	土師器 須恵器	S11→本跡

2 平安時代末から中世初頭にかけての遺構と遺物

当時代の遺構は、掘立柱建物跡5棟、堀跡1条、溝跡3条、道路跡1条、柵跡1列が確認された。以下、遺構と遺物について記述する。なお、第1号道路跡の実測図については第1号堀跡・第2号溝跡の実測図、第5・6号溝跡の平面図については遺構全体図にそれぞれ併せて記載する。

(1) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡（第8図）

位置 調査1区東部のA2j6区、標高29.0mの台地平坦部に立地し、第1号堀跡の土橋部に軸線を直交するように位置している。

重複関係 P3・P4は、第7号掘立柱建物跡のP1・P4をそれぞれ掘り込んでおり、P3は第1号柵のP3に掘り込まれている。

規模と形状 桁行2間、梁行1間の側柱建物で、桁行方向N-16°-Eの南北棟である。規模は、桁行4.8m、梁行2.7mで、柱間寸法は桁行が2.4m、梁行が2.7mを基調としている。面積は13.0㎡である。

ビット 6か所。形状は長径0.6~1.5m、短径0.5~0.7mの楕円形状を呈し、深さは24~53cmである。P1~P4及びP6の底面には、柱の当たり痕が確認された。土層は、P6の第3・4層は埋土と考えられ、他の層はいずれも柱抜き取り後の覆土である。

土層解説

1 暗褐色	ロームブロック少量	5 黒褐色	ローム粒子少量
2 褐色	ロームブロック多量	6 褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック中量	7 黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
4 褐色	ロームブロック中量	8 褐色	ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片27点（杯8・高台付杯1・甕18）、須恵器片6点（甕）、石器1点（砥石）が出土しており、いずれも細片である。それらの中、ビットからの出土遺物は、土師器杯片、須恵器甕片、砥石各1点で、他の遺物は確認面に散在して出土している。Q1はP1の覆土中からの出土である。出土状況から、柱抜き取り後に流れ込んだものと考えられる。

所見 時期は、位置と重複関係から平安時代末から中世初頭と考えられる。第1号堀跡の土橋部に構築されていることや、第1号堀跡の軸線と本跡の軸線がほぼ直交することから、この2つの遺構には関連性が想定され、出入りする場所に設けられた門などの構築物の可能性が想定される。

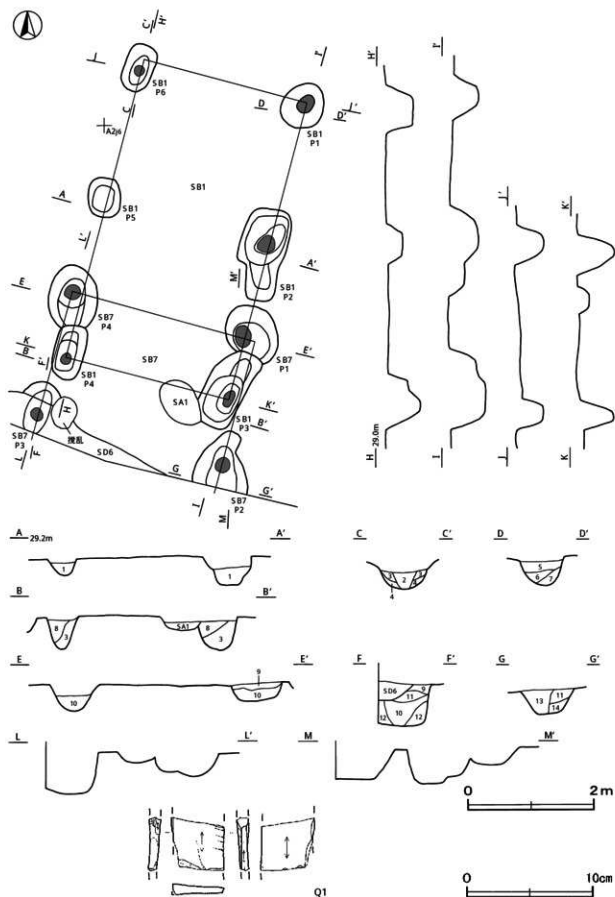
第7号掘立柱建物跡（第8図）

位置 調査1区東部のB2a6区、標高29.0mの台地平坦部に立地し、第1号堀跡の土橋部に軸線を直交するように位置している。

重複関係 P1・P4が第1号掘立柱建物のP3・P4に、P3が第6号溝にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 南部が調査区外に延びるため、全体の規模は明らかでない。確認された規模は、桁行2.0m、梁行2.8mで、柱間寸法は桁行が2.1m、梁行が3.0mを基調としている。梁行1間の側柱建物で、桁行方向N-16°-Eの南北棟と推定される。

ビット 4か所。形状は長径1.0m、短径0.8mほどの楕円形を呈し、深さは29~65cmである。すべてのビットの底面には、柱の当たり痕が確認された。P2の第11・14層とP3の第12層は埋土、他の土層はいずれも柱抜き取り後の覆土である。



第8图 第1・7号掘立柱建物跡・第1号掘立柱建物跡出土遺物実測図

土層解説

9 黒褐色	ローム粒子少量	12 褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
10 暗褐色	ロームブロック中量	13 黒褐色	ローム粒子少量, 炭化粒子微量
11 暗褐色	ロームブロック少量	14 黒褐色	ローム粒子微量

遺物出土状況 土師器片7点(杯3・甕4), 須恵器片2点(甕)が出土しており, いずれも細片のため図示できない。土器は確認面に散在して出土している。

所見 時期は, 位置と重複関係から平安時代末から中世初頭と考えられる。第1号堀跡の土橋部に構築されていることや, 第1号堀跡の軸線と本跡の軸線がほぼ直交することから, この2つの遺構には, 第1号掘立柱建物跡と同様に関連性が想定され, 出入りする場所に設けられた門などの構築物の可能性が想定される。

第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第8図)

番号	図種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	磁石	(42)	4.2	1.0	(20.1)	凝灰岩	砥面4面	P1層土中	

第4号掘立柱建物跡(第9・10図)

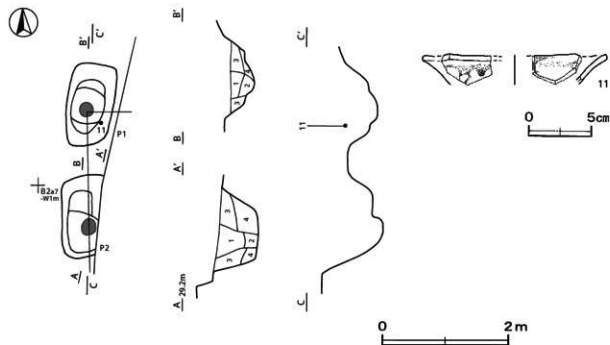
位置 調査1区東部のA2j6区, 標高29.0mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 本跡は東側の農道下層及び南調査区外へ延びるため, 全体の様相は不明である。確認された掘り方の配置と形状から, 柱軸方向 $N-0^\circ$ の南北棟と推測され, 柱間寸法は1.8mである。

ビット 2か所。形状は長軸1.2~1.3m, 短軸0.7mの隅丸長方形を呈し, 確認面からの深さは50~58cmである。両掘り方の底面には, 柱の当たり痕と考えられる硬化面が確認された。第1・2層は, いずれも柱抜き取り後の覆土で, 第3・4層は, 建物構築の際の埋土と考えられる。

土層解説

1 褐色	ローム粒子中量	3 褐色	ロームブロック多量
2 褐色	ロームブロック少量	4 褐色	ロームブロック中量



第9図 第4号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

遺物出土状況 須恵器片（壺）、磁器片（皿），金属器（釘）がそれぞれ1点ずつ出土している。11は覆土土層からの出土で、流れ込んだものと考えられる。

所見 掘り方は2か所確認されたのみであるが、掘り方の規模と形状及びその配置から掘立柱建物跡と判断した。時期は、形状と出土遺物から古代から中世と考えられる。

第4号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第9図）

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土・色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
11	皿カ	磁器	144	23	-	橙・オリブ質	透明釉	青磁 口縁部波状	中国カ	覆土土層	5%

第5号掘立柱建物跡（第10・11図）

位置 調査2区西部のA2j0区、標高28.9mの台地平坦部に位置している。

重複関係 P6が第6号掘立柱建物跡のP2を掘り込んでいる。

規模と形状 西部は農道下に延びるため全体の様相は不明である。桁行3間、梁行1間の側柱建物と推測され、桁行方向N-68°-Wの東西棟である。規模は、桁行5.0m、梁行3.0mで、柱間寸法は桁行1.5m、梁行が3.0mを基調としている。面積は15㎡ほどと推定される。

ビット 7か所。形状は長径0.8~1.1m、短径0.5~0.7mの楕円形を呈し、深さは43~57cmである。すべての掘り方の底部で、柱の当たり痕が確認された。第1・2層及び第6層は、柱抜き取り後の覆土、第3~5層は、埋土と考えられる。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子微量	4 褐色	ロームブロック少量
2 暗褐色	ロームブロック微量	5 褐色	ロームブロック中量
3 暗褐色	ロームブロック少量	6 暗褐色	ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片10点（壺）、須恵器片1点（壺）、土師質土器片2点（小皿）が出土している。土器は確認面から出土しているが、細片で接合関係もほとんど見られない。12・14はP5の覆土中、13は確認面からの出土である。

所見 時期は、第1号堀跡と木跡の軸線がほぼ同じであることから、第1号堀跡が機能していた時期と大差はなく、平安時代末から中世初頭の可能性がある。

第6号掘立柱建物跡（第10図）

位置 調査2区西部のA2j9区、標高28.9mの台地平坦部に位置している。

重複関係 P2は第5号掘立柱建物のP6、P4が段切り状遺構に掘り込まれている。

規模と形状 西部は農道下に延びるため、全体の様相は明確ではない。桁行2間、梁行1間の側柱建物と推定され、桁行方向N-20°-Eの南北棟である。規模は、桁行4.4m、梁行2.9mで、柱間寸法は桁行が2.1m、梁行が3.0mを基調としている。面積は12.7㎡ほどと推定される。

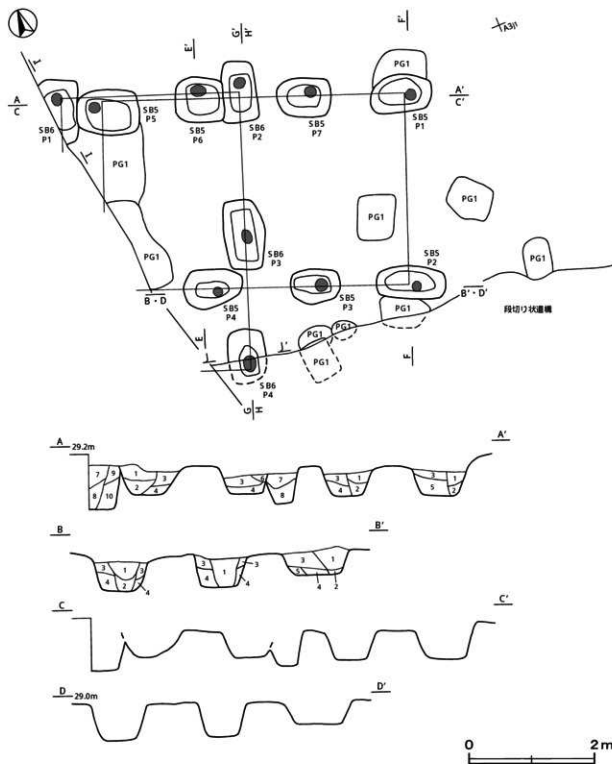
ビット 4か所。形状は長軸1.0~1.1m、短軸0.5~0.7mの隅丸長方形を呈し、深さは58~71cmである。すべての掘り方の底部で、柱の当たり痕が確認された。第7・8層は柱抜き取り後の覆土、第9・10層は埋土と考えられる。

土層解説

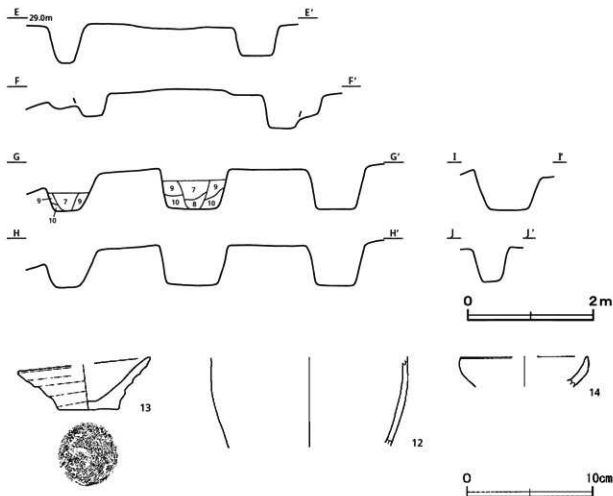
7 暗褐色	ローム粒子微量	9 暗褐色	ロームブロック微量
8 暗褐色	ローム粒子少量	10 暗褐色	ロームブロック少量

遺物出土状況 掘り方から遺物は出土していない。本跡は、第5号掘立柱建物跡と重なるように検出され、確認面から出土した遺物については明確に分類できなかった。

所見 時期は、第1号堀跡と本跡の軸線がほぼあうことから、第1号堀跡が機能していた時期と大差のない平安時代末から中世初頭と考えられ、第5号掘立柱建物より古い時期である。



第10図 第5・6号掘立柱建物跡実測図



第11図 第5・6号掘立柱建物跡・第5号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第5号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第11図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
12	須恵器	壺	-	(70)	-	長石	黄灰	普通	外面わずかに嵐方向のタタキ目	自然釉	P 5 層土中 5%
13	土師質土器	小皿	[10.4]	41	41	長石・石英・ 磁石	明黄褐色	普通	体部内外面口クロナデ	底部回転糸切り	破断面 70%
14	土師質土器	小皿	[10.0]	(2.4)	-	長石・石英・ 磁石	橙	普通	口縁部ナデ		P 5 層土中 5%

表4 平安時代末から中世初頭にかけての掘立柱建物跡一覧表

番号	位置	方位方向	柱間数 (形・間)	規模 (m)	面積 (m ²)	構造	桁行柱間 (m)	梁行柱間 (m)	柱穴平面形	深さ (cm)	主な出土遺物	備考 (時期・古→新)
1	A2]6	N-16°-E	2×1	4.8×2.7	13.0	佛柱	2.1-2.6	2.7	隅丸長方形 楕円形	24-53	土師器 石器	SB7→本跡→SA1
4	A2]6	N-0°	(1)×-	-	-	[佛柱]	1.9	-	隅丸長方形	50-58	須恵器 金属器	
5	A2]0	N-66°-W	3×1	5.0×3.0	[15.0]	佛柱	1.5-1.7	3.0-3.2	楕円形	43-57	土師器 土師質土器	SB6→本跡
6	A2]9	N-20°-E	(2)×(1)	(4.4)×(2.9)	[12.7]	[佛柱]	2.0-2.4	(2.9)	隅丸長方形	58-71	-	本跡→SB5
7	B2a6	N-16°-E	(1)×1	(2.0)×2.8	-	[佛柱]	(2.0)	2.8-3.0	楕円形	29-65	土師器 須恵器	本跡→SB1

(2) 堀跡

第1号堀跡(第12~14図)

位置 調査1区西部のA1g9区から調査3区東部のB4f5区、標高29.0~30.1mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第2号住居跡を掘り込み、段切り状遺構に掘り込まれている。

規模と形状 調査1~3区を縦断するように検出された。上幅3.7~4.4m、下幅2.4~3.2m、深さ51~101cmで、北西から南東に直線状に伸び、長さ109.2mが確認された。断面形は逆台形で、壁は外傾して立ち上がっている。堀跡は連続しておらず、調査1区の東部A2j5区で立ち上がっている。この掘り残し部には、掘立柱建物跡と柵跡が確認されている。また、調査2区の中央部B3c6区には、高さ20~30cmの底面の盛り上がり部がある。主軸方向は掘り残し部を境として、西側がN-71°-W、東側がN-74°-Wで、わずかに軸線の相違が見られる。底面の標高は、西部27.9m、東部29.6mで西に向かって傾斜している。

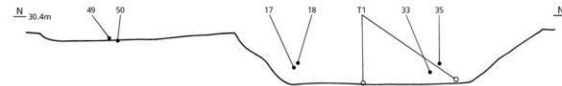
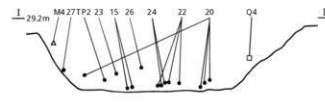
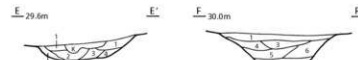
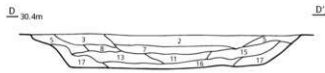
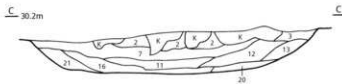
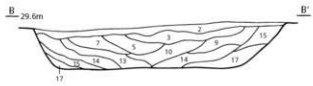
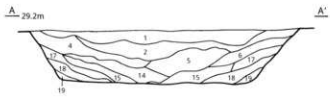
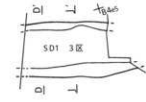
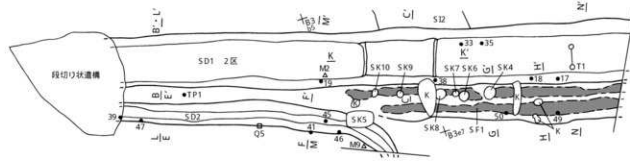
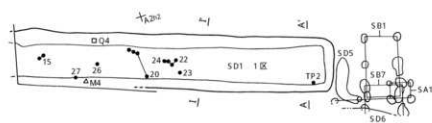
覆土 21層からなる。第1層は表土の耕作土である。一部にブロック状の堆積状況も見られるが、大半は周囲の土が流れ込んだ自然堆積と考えられる。

土層解説

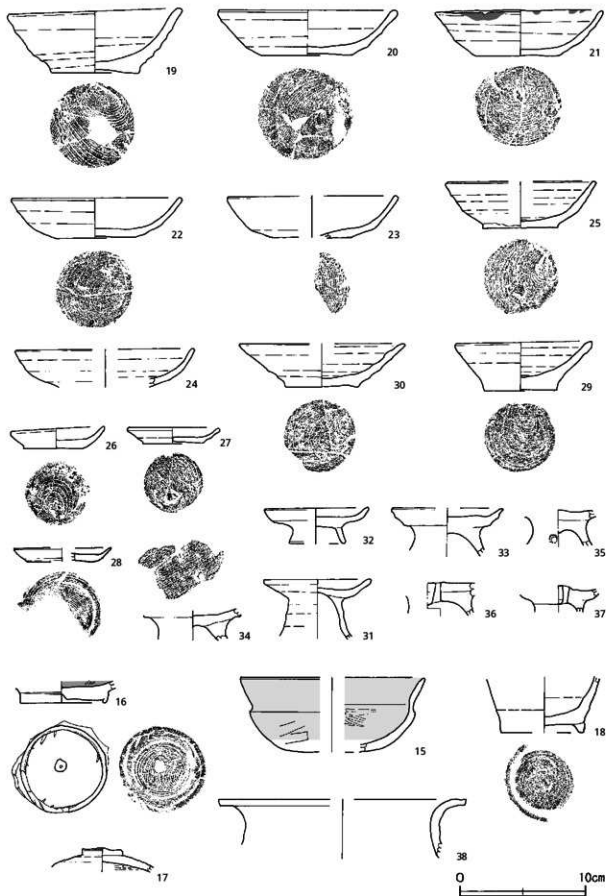
1 黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	11 暗褐色	ローム粒子少量
2 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量	12 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量	13 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
4 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	14 褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
5 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	15 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
6 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	16 暗褐色	ロームブロック微量
7 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	17 褐色	ロームブロック少量
8 褐色	ローム粒子中量	18 灰褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
9 褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量	19 暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
10 褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	20 褐色	ロームブロック中量
		21 暗褐色	ロームブロック少量

遺物出土状況 土師質土器630点(埴248・小皿358・高台付小皿15・内耳鍋9)、陶器片26点(甕)、土製品5点(土鏝)、石器28点(砥石19・火打石7・石臼1・浮子1)、金属器8点(刀子1・釘6・鉄1)、瓦片10点(平瓦)、古銭1点(銭種不明)、鉄滓5,318kg(流動滓、椀状滓、羽口、スコリア)のほか、縄文土器片5点(深鉢)、土師器片2,872点(杯242・高台付杯111・甕2,519)、須恵器片382点(杯144・高台付杯6・蓋2・盤1・壺8・甕221)が出土している。土師器片と須恵器片の多くは細片で接合関係もほとんどないことから、埋没過程で混入したと考えられる。15・20・22・24は1区の覆土下層から出土した破片が接合したものである。そのほか、1区ではTP2が覆土下層、23・26・27・Q4が覆土中層、M4が覆土上層、2区では19・33・T1・M2が覆土下層、17・18・35・38が覆土中層、TP1・Q2が確認面からそれぞれ出土している。また、1区では16・21・28・31・32・DP1・M5~M8、2区では25・29・30・34・37・DP2・DP3・Q3・M3、3区ではTP3が覆土中からそれぞれ出土している。

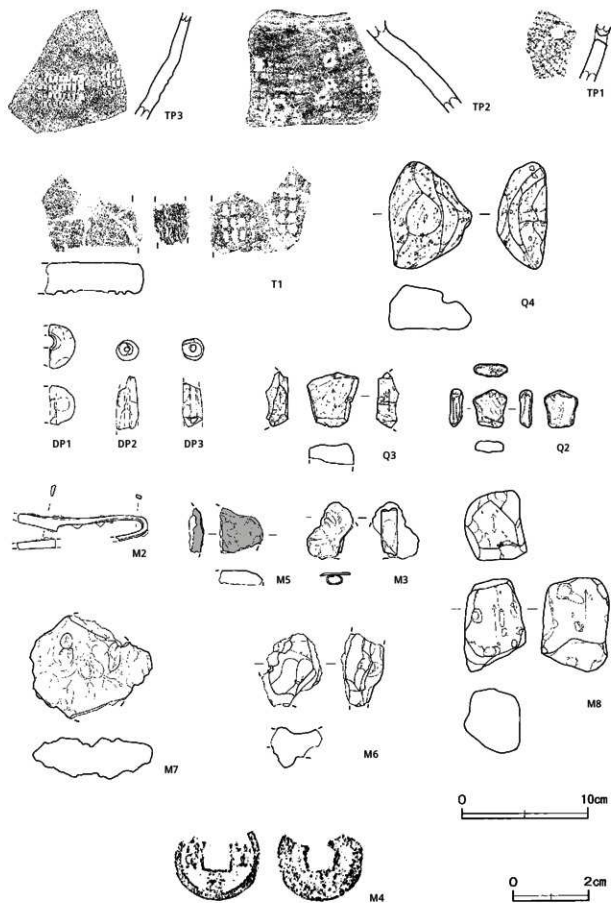
所見 時期は、出土遺物から平安時代末から中世初頭と考えられる。本跡は、断面形や規模から中世初頭の館跡に伴う堀の可能性があり、調査1区の掘り残し部は出入りに使用される土橋の役割を担っていると考えられる。調査2区の底面の盛り上がりの性格は不明である。



第12图 第1号堀跡・第2号溝跡・第1号道路跡実測図



第13图 第1号掘跡出土遺物実測図(1)



第14图 第1号掘跡出土遺物実測図(2)

第1号掘跡出土遺物観察表(第13・14図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
15	土師器	坏	[145]	5.9	-	長石	にぶい	普通	外部外側へラ削り 内面へラ磨き 口縁部から体部に介する部分	覆土下層	30%
16	土師器	高台付小皿	-	(1.8)	6.7	長石・雲母	にぶい	普通	内面へラ磨き 底部糸切り後高台取り付け 藍色焼成	1区覆土中	底部焼成後穿孔 30%
17	須恵器	刷	-	(1.9)	-	長石・石英	灰黄	普通	外部回転へラ削り 内面ナデ	覆土中層	5%
18	須恵器	壺	-	(4.4)	[64]	長石・石英	灰白	普通	底部回転へラ削り後高台取り付け	覆土中層	10%
19	土師土器	刷	134	5.1	6.9	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい	普通	体部内外面クロナデ 底部回転糸切り	覆土下層	90% PL4
20	土師土器	刷	140	3.6	7.1	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	体部内外面クロナデ 底部回転糸切り	覆土下層	50%
21	土師土器	刷	131	3.6	6.4	長石・雲母	明黄褐色	普通	体部内外面クロナデ 底部回転糸切り 藍色付着	1区覆土中	灯棚面に転用 60%
22	土師土器	刷	133	3.2	6.0	長石・石英・雲母	にぶい	普通	体部内外面クロナデ 底部回転糸切り	覆土下層	60%
23	土師土器	刷	[133]	3.3	[62]	長石・石英	浅黄褐色	普通	体部内外面丁寧なクロナデ 底部回転糸切り	覆土中層	40%
24	土師土器	刷	[140]	(3.0)	-	石英・雲母	にぶい	普通	体部内外面クロナデ	覆土下層	5%
25	土師土器	刷	[116]	3.7	6.0	長石・石英・雲母	橙	普通	体部内外面クロナデ 底部回転糸切り	2区覆土中	20%
26	土師土器	小皿	7.1	1.8	4.4	長石・雲母	灰褐色	普通	体部内外面クロナデ 底部回転糸切り	覆土中層	80% PL3
27	土師土器	小皿	7.1	1.3	4.7	長石・石英・雲母	にぶい	普通	体部内外面クロナデ 底部回転糸切り	覆土中層	75% PL3
28	土師土器	小皿	7.6	1.1	[56]	長石・雲母	にぶい	普通	体部内外面丁寧なクロナデ 底部回転糸切り	1区覆土中	45%
29	土師土器	小皿	10.8	3.9	5.8	長石・石英・雲母・緑泥・赤色粒子	橙	普通	体部内外面クロナデ 底部回転糸切り	2区覆土中	90% PL4
30	土師土器	小皿	[130]	3.5	5.6	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部内外面クロナデ 底部回転糸切り	2区覆土中	50%
31	土師土器	高台付小皿	8.4	4.7	-	長石・石英・雲母	にぶい	普通	底部取り付け後内外面丁寧なクロナデ	1区覆土中	40% PL4
32	土師土器	高台付小皿	8.2	2.8	[44]	長石・石英・雲母	にぶい	普通	底部取り付け後内外面丁寧なクロナデ	1区覆土中	85% PL3
33	土師土器	高台付小皿	(8.6)	(3.8)	-	長石・雲母・緑泥	橙	普通	底部取り付け後内外面丁寧なクロナデ	覆土下層	40%
34	土師土器	高台付小皿	-	(2.4)	-	長石・石英	橙	普通	体部内外面クロナデ 底部底面織代織	2区覆土中	20%
35	土師土器	高台付小皿	-	(2.9)	-	長石・石英・雲母	にぶい	普通	体部内外面クロナデ 締付工具による穿孔	覆土中層	20%
36	土師土器	高台付小皿	-	(2.7)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	浅黄褐色	普通	底部取り付け後中央部に穿孔 内外面クロナデ	1区覆土中	20% PL3
37	土師土器	高台付小皿	-	(2.2)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	浅黄褐色	普通	底部取り付け後周中央部に穿孔 内外面クロナデ	2区覆土中	20% PL3
TP1	織文土器	深鉢	-	(4.6)	-	長石・石英	明赤褐色	普通	単線織文 R L 織文 補修孔	確認面	縄文前期 5%

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土・色調	結付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
38	甕	陶器	[194]	(4.7)	-	にぶい	自然釉	口縁部強く外反	常滑 12-13c	覆土中層	5%
TP2	甕	陶器	-	(7.3)	-	灰褐色	自然釉	体部外面格子状のタタキ目	常滑 12c 代	覆土下層	
TP3	甕	陶器	-	(8.5)	-	にぶい	-	体部外面格子状のタタキ目	常滑	3区覆土中	

番号	器種	最大径	幅	厚さ	重量	材質(胎土)	特徴	出土位置	備考
DP1	球状土師	(20)	(0.9)	3.2	(19.5)	長石・石英	孔径80mm 外面ナデ 指頭押圧痕	1区覆土中	
DP2	甕状土師	(42)	1.7	1.6	8.3	石英	孔径30mm 外面ナデ 指頭押圧痕	2区覆土中	
DP3	甕状土師	(34)	(1.6)	(1.7)	6.7	石英・雲母	孔径55mm 外面丁寧なナデ 指頭押圧痕	2区覆土中	
T1	平瓦	(7.6)	(8.0)	2.5	(144.0)	長石・石英・雲母	△面格子叩き	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q2	火打石	30	2.7	1.0	10.3	瑪瑙	鎌倉城を使用 厚減強い	確認面	
Q3	磁石	5.4	4.0	1.8	6.5	軽石	磁面 3面 寛磁石	2区覆土中	
Q4	浮子	8.4	6.5	3.9	36.9	軽石	断面がU字状の凹み	覆土中層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M2	鉄	(10.3)	(2.9)	0.4	(9.1)	鉄	先端部欠損 基部断面長方形 糸切痕	覆土下層	PL4
M3	不明銅板	(4.5)	(3.7)	0.1	(9.8)	銅	三つ葉状 表面に葉脈状の彫刻	2区覆土中	
M8	磁石	7.4	4.9	5.3	47.1	スコリア	磁面 3面 軽石状磁面の転用 寛磁石	1区覆土中	

番号	器種	径	孔径	厚さ	重量	初周年	材質	特徴	出土位置	備考
M4	→○口甕	2.3	0.7	0.1	(1.4)	-	銅	上部欠損 漆着	覆土上層	

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	特徴	出土位置	備考
M5	開口	(35)	(3.4)	(12)	(12)	磁層なし 先端部外部の破片 粘土は石英とスサを含む粘土	1区覆土中	
M6	流出口溝	5.6	4.7	3.3	(57g)	磁層弱 下面に断面U字状の流れ痕 上面下層に伊壁の粘土層入	1区覆土中	
M7	桶状溝	(8.2)	9.7	3.3	(348.0)	磁層中 上面に棒状工具痕 下面わずかに風状	1区覆土中	

(3) 溝跡

第2号溝跡 (第12・15・16区)

位置 調査2区南部のB3b1区～B3e5区、標高29.7mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第5号土坑と段切り状遺構に掘り込まれている。

規模と形状 上幅1.6～2.1m、下幅0.3～0.7m、深さ48～76cmで、長さ24.6mが確認された。断面形はU字状で、北西から南東に延びており、B3d5区の第5号土坑に掘り込まれている位置で南に屈曲し、主軸方向は西側がN-71°-W、東側がN-50°-Wである。底面の標高は、西部28.8m、東部29.2mで西に向かって傾斜している。

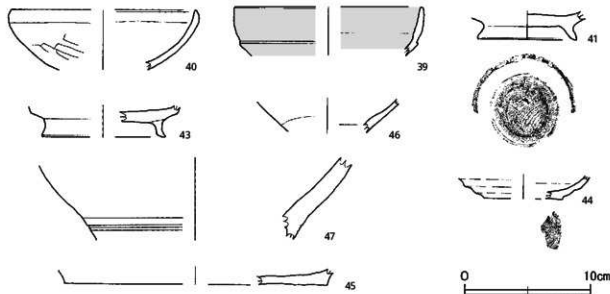
覆土 7層からなる。第1層は表土で、耕作の影響を受けている。覆土はレンズ状の堆積状況を示し、周囲の土が流れ込んだ自然堆積と考えられる。

土層解説

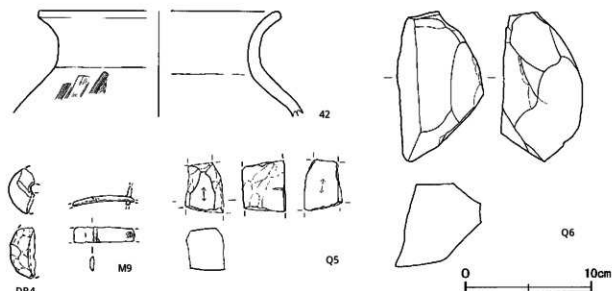
1 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	5 褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子中量、炭化粒子微量	6 褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	7 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
4 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量		

遺物出土状況 土師質土器38点(碗12・小皿18・内耳鍋8)、陶器片23点(皿7・鉢6・甕10)、土製品3点(土錘)、金属器7点(釘5・釵1・不明1)、瓦片2点(平瓦)、鉄滓138.1gのほか、土師器片355点(杯31・高台付杯18・甕306)、須恵器片84点(杯46・壺2・甕36)が出土している。土師器片と須恵器片の多くは覆土上層から中層で出土しており、埋没途中で流れ込んだと考えられる。39・46・47・Q5は底面、41・45・M9は覆土上層、40・42～44・DP4・Q6は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から平安時代末から中世初頭と考えられる。第1号堀跡西部の軸線と平行であることや2つの遺構が重複しないことから、第1号堀跡が機能していた時期と同時期に機能していたことが推測され、第1号堀跡とともに館跡の堀の可能性がある。



第15図 第2号溝跡出土遺物実測図(1)



第16図 第2号溝跡出土遺物実測図(2)

第2号溝跡出土遺物観察表(第15・16図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
39	土師器	環	[146]	(39)	-	長石・石英・赤色砂	橙	普通	口辺部横ナデ 赤彩	底面	5%
40	土師器	環	[146]	(47)	-	長石・石英・赤色砂	に濃い黄橙	普通	口辺部横ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ	覆土中	10%
41	土師器	高台付筒	-	(23)	77	長石・石英	に濃い橙	普通	底部糸切り後高台貼り付け 柄部底面光沢あり	覆土上層	転用確力5%
42	土師器	瓶	[188]	(83)	-	長石・石英	に濃い黄橙	普通	頸部内外面横ナデ 体部外面刷毛目調製後へラ削り	覆土中	5%
43	須恵器	高台付杯	-	(26)	[96]	長石・石英	灰	普通	底部回転へラ切り後高台貼り付け	覆土中	5%
44	土師製土器	小皿	-	(19)	[63]	長石・石英・赤色砂	に濃い黄橙	普通	体部外面口クロナデ 底部回転糸切り	覆土中	10%
45	土師製土器	内耳筒	-	(13)	[208]	長石・石英・赤色砂	橙	普通	内外面ナデ	覆土上層	5%

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土・色調	絵付・輪筆	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
46	皿カ	磁器	-	(26)	-	灰白・明オリブ灰	透明釉	内面及び外面上部輪筆	中国	底面	5%
47	片口鉢カ	陶器	-	(65)	-	灰黄・黄灰	自然釉	高台部貼り付け	常滑12c代	底面	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質(胎土)	特徴	出土位置	備考
DP4	球状土師	(40)	(20)	(35)	(206)	長石・石英	外面ナデ 面線押圧痕	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q5	磁石	(40)	3.4	(30)	(59.4)	凝灰岩	磁面2面 磁面は円滑	底面	
Q6	砂石カ	11.9	6.9	6.6	526.0	玄武岩	被打面3面 火による赤変	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M9	不明銅器	(49)	1.3	0.3	(9.6)	銅	表面に平行な線刻 端部に釘貫通	覆土上層	

第5号溝跡(第17図・遺構全体図)

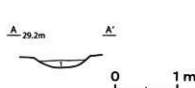
位置 調査1区東部のA2j5区、標高29.9mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1号柵のP5に掘り込まれている。

規模と形状 上幅0.5~1.2m、下幅0.2~0.5m、深さ8~15cmで、長さ4.2mが確認された。北東から南西

(N-18° - E) に直線状に延び、北端から約1.5mの位置で北西から南東 (N-57° - W) へL字状に屈曲し延びている。断面形は浅いU字状を呈し、壁は外傾して立ち上がっている。底面の標高は北部、南部ともに29.7mで明確な高低差はない。

覆土 単一層である。堆積状況は不明である。



第17図 第5号溝跡実測図

土層解説

1 前褐色 ロームブロック微量

所見 時期は、位置と重複関係から平安時代末から中世初頭と考えられる。第1号掘立柱建物跡との関連を想定したが、明確にできなかった。

第6号溝跡 (第18図・遺構全体図)

位置 調査1区東部のB 2 a5～B 2 a6区、標高29.0mの台地平坦部に位置している。

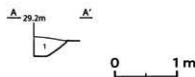
重複関係 第7号掘立柱建物跡のP 3を掘り込み、第2号ピット群のP15に掘り込まれている。

規模と形状 東部、西部及び南壁部は調査区域外に延びているため、形状は明確でない。深さ28～32cm、長さ3.9mで、南東から北西方向 (N-68° - W) に直線状に延びている。断面形は浅いU字状と推測され、壁は外傾して立ち上がっている。底面の標高は東部が29.1m、西部が28.5mで、西部がわずかに低くなっている。

覆土 単一層である。締まりがやや弱いことから人為堆積の可能性はある。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子微量



第18図 第6号溝跡実測図

所見 時期は、第7号掘立柱建物跡を掘り込んでいることから中世と考えられる。軸線が第1号掘跡とはほぼ平行していることから、第1号掘跡を意識して掘られた溝の可能性も想定される。

表5 平安時代末から中世初頭にかけての溝跡一覧表

番号	位置	方向	形状	規模				覆土	主な出土遺物	備考 (時期・古・新)
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)			
2	B3b1 - B3c5	N-71° - W N-50° - W	U字状	24.6	1.6-2.1	0.3-0.7	46-76	自然	土師器 高麗 須磨器 土師質土器	本跡→SK5・段切り状遺構
5	A25	N-18° - E N-57° - W	U字状	4.2	0.5-1.2	0.2-0.5	8-15	-	-	本跡→SA1
6	B2a5 - B2a6	(N-68° - W)	(U字状)	3.9	-	-	(28-32)	[人殉]	-	S87→本跡→PG2

(4) 道路跡

第1号道路跡 (第12・19図)

位置 調査2区南部のB 3 c5～B 3 e0区、標高30mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第4・6～10号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 幅4.8～5.7m、長さ22.3mの範囲で、確認面から15cmほど下層に、東西方向で直線状に延びる硬化面を2条確認した。硬化面は南北に平行して位置し、北側の硬化面は幅0.4～0.9m、長さ21.6m、南側の硬化面は幅0.4～1.1m、長さ18.9mである。北側硬化面の西部は削平されており、南側の硬化面は第5号土坑の東側で削平されている。東部はどちらの硬化面も市道下に延びており、主軸方向は南北ともにN-73°-Wである。

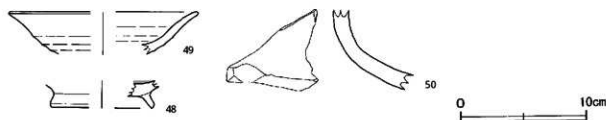
覆土 6層に分層される。第1～3層が覆土で、凹地に周囲の土砂が流れ込んだ自然堆積と考えられる。第4・5層は硬化面で、硬化面の層厚は3～14cmである。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	4 暗褐色	ロームブロック・炭土粒子少量
2 暗褐色	ロームブロック少量、炭土粒子微量	5 暗褐色	ロームブロック少量
3 暗褐色	ロームブロック微量	6 褐色	ロームブロック中量

遺物出土状況 土師質土器片1点(小皿)、陶器片2点(碗・甕)、磁器片2点(皿)、土製品1点(土鍾)、鉄製品3点(鎌カ1・不明2)、鉄銚440gのほか、土師器片97点(坯26・高台付坯6・甕65)、須恵器片8点(坯2・甕6)が出土している。表土は薄く、確認面からの出土も多いことから、耕作などによって混入した遺物も多いと考えられる。49・50は硬化面上、48は覆土中からの出土である。

所見 溝跡として調査を始めたが、東西方向に帯状の硬化面を検出したことから道路跡とした。時期は、第1号堀跡と平行していることから、堀跡を意識して構築されたと考えられ、平安時代末から中世初頭の可能性が想定される。硬化面の土層が上下に2層あることから、南側が長期間使用されたと推測される。



第19図 第1号道路跡出土遺物実測図

第1号道路跡出土遺物観察表(第19図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	構成	手法の特徴	出土位置	備考
48	土師器	高台付坯	-	(22)	[8.0]	長石・石英	黄	普通	高台貼り付け後ナデ 黒色処理	覆土中	5%
49	土師器	高台付坯	[14.0]	(3.4)	-	長石・石英・ 霞母・炭化粒子	淡黄橙	普通	口縁部外反 体部内外面口クロナデ	硬化面上	20%

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土・色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
50	甕	陶器	-	(6.4)	-	灰白・にびり赤 澁	自然釉	体部輪郭みによる成形	常滑	硬化面上	

(5) 堀跡

第1号堀跡(第20・21図)

位置 調査1区東部のA2j5区～B2a6区、標高29.0mの台地平坦部に位置している。

重複関係 P3が第1号掘立柱建物跡のP3、P5が第5号溝跡、P4が第2号ピット群のP11をそれぞれ掘り込んでいる。

規模と形状 西部が調査区域外、東部が農道下にそれぞれ延びるため、全体の規模と形状は不明確である。確認された部分の柱間は1.6~2.5mで、柱列方向はN-75°-Wである。南側に4本のピットが並び、その東部の北側に2本のピットが平行した配置で、南北の柱間は1.3mである。

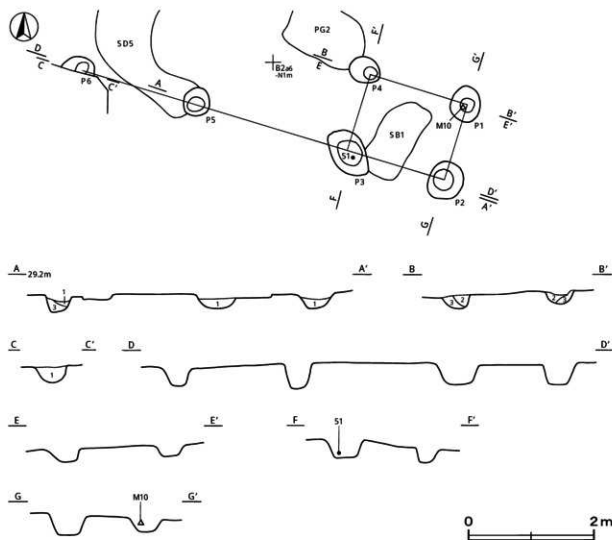
ピット 6か所。形状は径46~85cmの円形または楕円形を呈し、深さは23~41cmである。土層はいずれも柱抜き取り後の覆土である。

土層解説

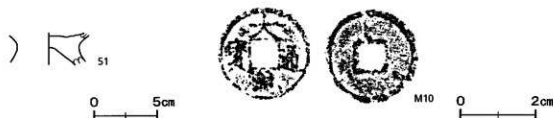
- | | | | |
|-------|------------------|------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 3 褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量 | | |

遺物出土状況 土師質土器（高台付小皿）と古銭（大観通寶）がそれぞれ1点ずつ出土している。51はP3の覆土下層、M10はP1の覆土中層から出土し、埋没過程で流れ込んだものと考えられる。

所見 P1~P4は小規模な掘立柱建物跡の可能性もあるが明確でないため、P2・P3の同軸線上にあるP5・P6とともに柵跡として扱った。第1号堀跡の掘り残し部に構築されていることや、第1号堀跡の軸線と本跡の軸線がほぼ平行であることから、出入りする場所に設けられた門の機能を持つ柵跡の可能性がある。時期は、出土遺物から平安時代末から中世初頭で、第1号掘立柱建物跡が廃絶された後の構築である。



第20図 第1号柵跡実測図



第21図 第1号掘跡出土遺物実測図

第1号掘跡出土遺物観察表 (第21図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
S1	土師製土器	高台付小皿	-	(25)	-	灰石・雲母	にがい橙	普通	脚部内外面口口ロナデ	P 3下層	10%

番号	銭種	径	孔径	厚さ	重量	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
M10	大観通寶	2.5	0.7	1.1	2.1	1107年	銅	真磨	P 1中層	

3 中世の遺構と遺物

当時代の遺構は、段切り状遺構1か所が確認された。以下、遺構と遺物について記述する。

段切り状遺構

調査2区の西部で、第1号掘跡及び第2号溝跡を削平するように平坦面を構築した段切り状遺構1か所が確認された。内部には、土坑1基とビット群1か所が位置している。以下、検出された遺構と遺物について記述する。

段切り状遺構 (第22・23図)

位置 調査2区西部のA 2j9～B 3 b1区、標高29.9mの台地平坦部に位置している。

確認状況 第1号掘跡及び第2号溝跡を削平するように平坦面を構築している。平坦面上に土坑1基、ビット群1か所が確認されている。西部は農道下へ、南部は調査区域外へ延びているため、全容は不明である。調査1区の東部では平坦面が確認できなかったことから、農道下で立ち上ると考えられる。

重複関係 第1号掘跡、第2号溝跡、第6号掘立柱建物跡、第1号ビット群のP 6を掘り込んでいる。

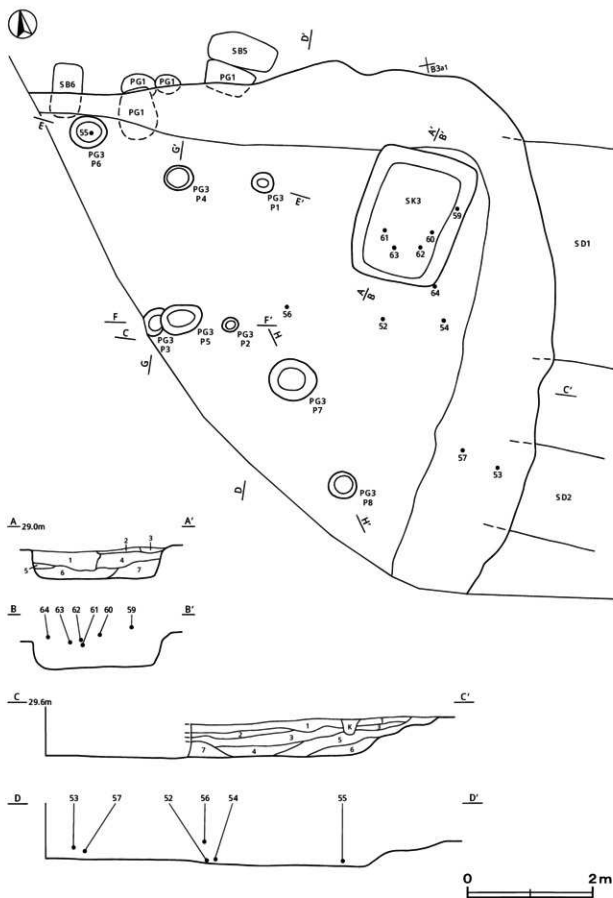
規模と形状 確認された規模は東西7.5m、南北8.2mで、確認面から底面に向かって緩やかに傾斜しながら、深さ34～51cm掘り込まれており、底面には東西6.8m、南北6.6mの平坦面が確認されている。北側の掘り込みは第1号掘跡の北壁を利用している。

覆土 7層に分層される。凹地に周囲の土砂が流れ込んだ、自然堆積と考えられる。

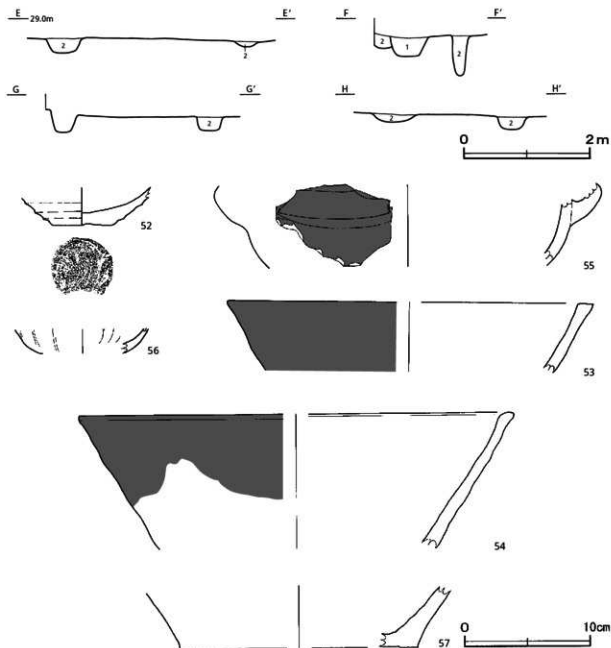
土層解説

1 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	5 褐色	ロームブロック少量
2 暗褐色	炭化粒子・ローム粒子少量	6 暗褐色	ロームブロック少量
3 暗褐色	ロームブロック少量	7 暗褐色	ローム粒子少量
4 褐色	ロームブロック中量		

遺物出土状況 土師製土器片21点(小皿11・内耳鍋9・茶釜1)、陶器片3点(皿1・甕2)、瓦片1点(平瓦カ)、石器2点(石臼・砥石)、鉄滓303gのほか、流れ込みと考えられる土師器片96点(杯10・高台付杯2・甕84)、須恵器片17点(杯3・甕14)が出土している。遺物は、第3号土坑の覆土上層及びその周辺から多く



第22図 段切り状遺構・第3号土坑・第3号ピット群実測図



第23図 第3号ピット群・段切り状遺構出土遺物実測図

出土している。52・54は第3号土坑南側の底面、55は覆土下層、53・56・57は覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土遺物と重複関係から中世と考えられる。第1号堀跡の底面の標高と段切り状遺構の平坦面の標高がほぼ等しいことから、平坦面を作り出すために第1号堀跡と第2号溝跡を利用した可能性がある。北東部の底面から第3号土坑や第3号ピット群が確認されていることから、本跡を造成した後にこれらの遺構が構築されたと推測される。

段切り状遺構出土遺物観察表 (第23図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	構成	手法の特徴	出土位置	備考
52	土師質土器	小皿	-	(30)	4.8	長石・石英・炭屑	橙	普通	体部内外顔口クロナデ 底部部転糸切り	底面	15%
53	土師質土器	内耳鍋	(29.0)	(55)	-	長石・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	外面煤付着	覆土中層	5%
54	土師質土器	内耳鍋	(34.4)	(10.7)	-	長石・石英	橙	普通	口縁部横ナデ 外面煤付着	中層	5%
55	土師質土器	茶釜	(26.0)	(6.4)	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	外耳部貼り付け 外面煤付着	覆土下層	5%

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土・色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
56	扁皿	陶器	-	(1.9)	-	にぶい黄橙・灰白	長石釉	内面縦方向の線	瀬戸・美濃 16-17c	覆土中層	5%
57	蓋	陶器	-	(4.9)	(1.8)	にぶい黄・暗赤	自然釉	外面ヘラナデ	常滑	覆土中層	5%

第3号土坑 (第22・24図)

位置 調査2区西部のB 2 a0区、標高28.6mの台地平坦部、段切り状遺構の北東部に位置している。

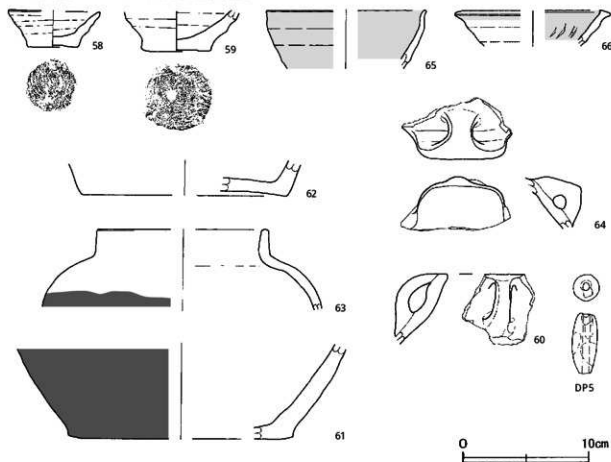
重複関係 第1号堀跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸2.2m、短軸1.6mの隅丸長方形で、深さは41cm、主軸方向はN-33°-Eである。底面は平坦で、壁は外積して立ち上がっている。

層土 7層に分層される。ロームブロックを含む層が多く、不規則な堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------|-------|----------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量 | 5 暗褐色 | ロームブロック微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 褐色 | ロームブロック中量 | 7 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | | |



第24図 第3号土坑出土遺物実測図

遺物出土状況 土師質土器片12点（皿4・内耳鍋6・茶釜2）、陶器片2点（碗・皿）、土製品3点（土鍾）が出土している。59～66・DP5はいずれも覆土上層から出土し、本跡が埋没した後に投棄されたものと考えられる。58は覆土中からの出土である。

所見 時期は、出土遺物と重複関係から中世と考えられる。本跡の北西コーナー一部が段切り状遺構の北壁を掘り込んでいることから、段切り状遺構構築後に本跡が掘り込まれたと考えられる。しかし、出土遺物が覆土中にほとんどなく、覆土上層に集中していることから、第3号土坑埋没後の凹部は廃棄場所として利用されていた可能性がある。

第3号土坑出土遺物観察表（第24図）

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
58	土師質土器	小皿	[7.1]	2.9	3.9	長石・石英	橙	普通	体部内外面口ウロナデ 底部回転糸切り	覆土中	60% PL3
59	土師質土器	小皿	-	(32)	5.5	長石・石英・ 赤色粘土	にぶい黄橙	普通	体部内外面口ウロナデ 底部回転糸切り後縁部一半分削り直し	覆土上層	70%
60	土師質土器	内耳鍋	-	(5.6)	-	長石・石英・ 赤色粘土	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ 外面保付着 耳は楕円形	覆土上層	5%
61	土師質土器	内耳鍋	-	(7.6)	[17.8]	長石・石英	橙	普通	体部内面ナデ 外面保付着	覆土上層	5%
62	土師質土器	内耳鍋	-	(2.8)	[16.2]	長石・石英・ 雲母・赤色粘土	にぶい橙	普通	体部内面ナデ 外面横ナデ 保付着	覆土上層	10%
63	土師質土器	茶釜	(13.2)	(6.4)	-	長石・石英・ 雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部及び体部外面丁寧な横ナデ 外面保付着	覆土上層	5%
64	土師質土器	茶釜カ	-	(4.1)	-	長石・石英・ 雲母	にぶい黄橙	普通	外面丁寧なナデ 耳は円形	覆土上層	5% P6と同一層位の可動遺物

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土・色調	結付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
65	天目茶碗	陶器	(12.5)	(4.6)	-	法興橙・にぶい橙	鉄釉	口縁部印曲強い	瀬戸・美濃	覆土上層	5%
66	御印	陶器	[12.4]	(2.8)	-	法興橙・緑灰	灰釉	口縁部及び体部内面施釉	瀬戸・美濃 14cカ	覆土上層	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質（胎土）	特徴	出土位置	備考
DP5	甕状土鍾	4.8	2.0	2.1	14.7	石英・雲母	孔径0.6cm 外面丁寧なナデ 底部押圧痕	覆土上層	

第3号ピット群（第22・23図）

位置 調査2区西部のA 2j9～B 2b0区、標高28.6mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 段切り状遺構の底部から8か所のピットが確認された。平面形は長径24～78cmの円形または楕円形で、深さは6～61cmである。

覆土 2層に分層される。堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 2 暗褐色 ロームブロック中量

所見 時期は、段切り状遺構に伴う時期で、中世と考えられる。

4 その他の遺構と遺物

時期や性格が明確でない掘立柱建物跡2棟、溝跡2条、土坑7基、ピット群2か所が確認された。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 掘立柱建物跡

第2号掘立柱建物跡 (第25図)

位置 調査3区北部のB4d4区、標高30.2mの台地平坦部に位置している。

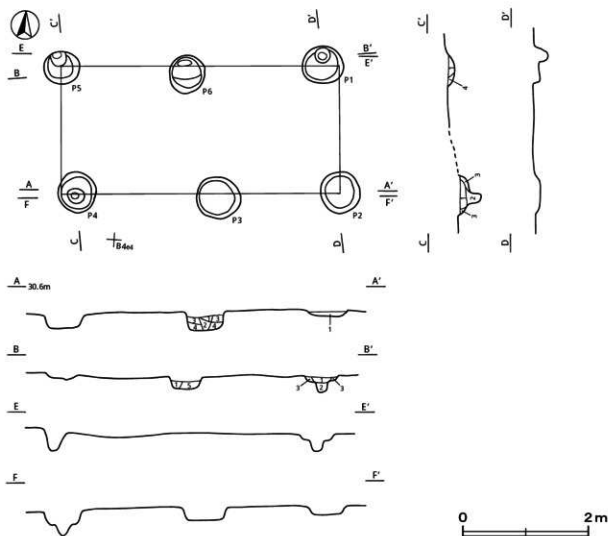
規模と形状 桁行2間、梁行1間の側柱建物で、桁行方向N-87°-Eの東西棟である。規模は、桁行4.2m、梁行2.2mで、柱間寸法は、桁行・梁行ともに2.1mを基調としている。面積は9.24㎡である。

ピット 6か所。柱穴はいずれも径55~68cmの円形を呈し、深さは12~40cmである。P1、P3、P4の第1・2層はいずれも柱抜き取り後の覆土で、第3・4層は埋土と考えられる。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子少量	4 褐色	ロームブロック中量
2 暗褐色	ロームブロック少量	5 褐色	ロームブロック少量
3 暗褐色	ロームブロック少量		

所見 時期は、出土遺物がなく明確でない。第1号掘跡の軸線と本跡の軸線とは違いが大きいことから、第1号掘跡が機能していた時期とは異なると考えられる。



第25図 第2号掘立柱建物跡実測図

第3号掘立柱建物跡 (第26図)

位置 調査3区南部のB4区、標高30.1mの台地平坦部に位置している。

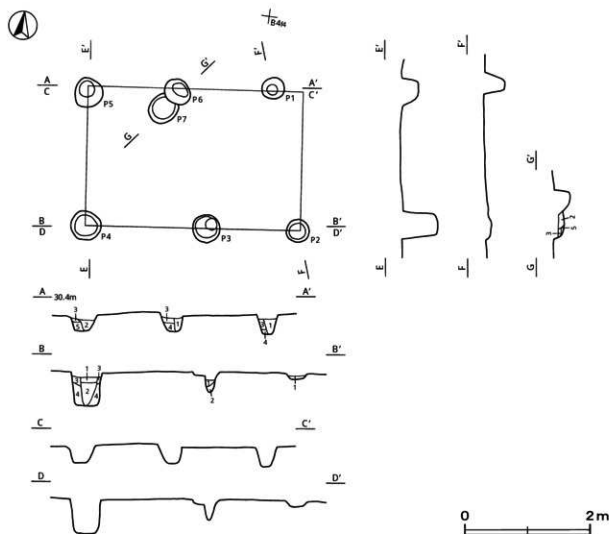
規模と形状 桁行2間、梁行1間の側柱建物で、桁行方向N-82°-Eの東西棟である。規模は、桁行3.4m、梁行2.2mで、柱間寸法は桁行が1.5m、梁行が2.2mを基調としている。面積は6.38㎡である。

ピット 7か所。柱穴は径33~47cmの円形を呈し、深さは9~53cmである。第1・2層は柱抜き取り後の覆土、第3~5層は埋土と考えられる。P7はP6に掘り込まれており、性格は不明である。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子少量	4 褐色	ロームブロック少量
2 暗褐色	ロームブロック微量	5 褐色	ロームブロック中量
3 暗褐色	ロームブロック少量		

所見 時期は、出土遺物がなく明確でない。柱間やピットの配置はやや不整であるが、第2号掘立柱建物跡と本跡の軸線及び建物方向がほぼ平行していることから、掘立柱建物跡として扱った。第2号掘立柱建物跡と同じく、第1号堀跡の軸線とは違いが大きいことから、第1号堀跡が機能していた時期とは異なると考えられる。第2号掘立柱建物跡とは、同時期の可能性がある。



第26図 第3号掘立柱建物跡実測図

表6 その他の掘立柱建物跡一覧表

番号	位置	掘立柱方向	柱間数 (桁・間)	規模 (m)	厚積 (m)	構造	掘立柱間 (m)	梁立柱間 (m)	柱穴平面形	深さ (cm)	主な出土遺物	備考 (時期・古・新)
2	B464	N-87°-E	2×1	42×22	92	竪柱	20-22	2.2	円形	12-40	-	
3	B473	N-82°-E	2×1	34×22	64	竪柱	13-20	2.2	円形	9-53	-	

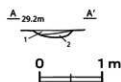
(2) 溝跡

時期及び性格が不明な溝跡2条について記述する。なお、出土遺物のない第3号溝跡の平面図は、遺構全体図に示すこととする。

第3号溝跡 (第27図・遺構全体図)

位置 調査1区西部のA1f0区、標高29.0mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 上幅0.5～0.6m、下幅0.2～0.3m、深さ2～11cmで、長さ2.5mが確認された。南東から北西方向(N-79°-W)に直線状で、西部は調査区域外へ延びている。東部は攪乱による削平のため検出できなかった。断面形は浅いU字状を呈し、壁は外傾して立ち上がっている。底面の標高は東部、西部ともに28.9mで、明確な高低差は確認できなかった。

第27図 第3号溝跡
実測図

覆土 2層に分層される。なだらかなレンズ状の堆積状況から、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
2 褐色 ロームブロック少量

所見 伴う遺物がなく、時期及び性格は不明である。

第4号溝跡 (第28図)

位置 調査2区東部のB3b7～B4c1区、標高30.0mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第2号堅穴住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 上幅0.3～0.8m、下幅0.1～0.3m、深さ15～34cmで、長さ18.3mが確認された。南東から北西方向(N-80°-W)にわずかに弧状で、東部は市道下へ延びている。調査3区では確認できなかったことから、市道下で立ち上るが屈曲していると考えられる。断面形は浅いU字状を呈し、壁は外傾して立ち上がっている。底面の標高は東部が29.7m、西部が29.8mで、東部がわずかに低くなっている。

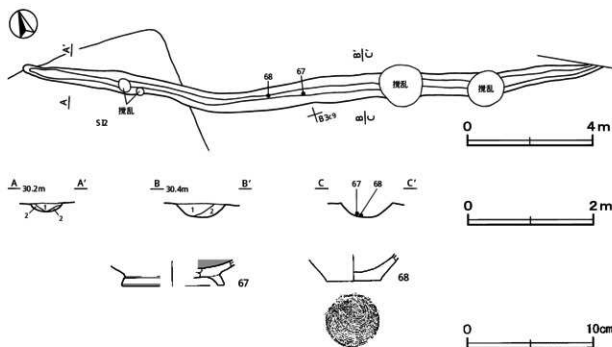
覆土 2層に分層される。レンズ状のなだらかな堆積状況から、自然堆積と考えられる。全体的に締まりは強い。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子微量 2 暗褐色 ローム粒子微量

遺物出土状況 土師器片45点(杯13・高台付杯5・甕27)、土師質土器片7点(小皿3・内耳鍋4)、陶器片1点(不明)、鉄滓2点が出土している。67は覆土下層、68は底面から出土しており、本跡が埋没する過程で流れ込んだものと考えられる。土師器片の出土が多いのは、第2号住居跡から混入したためと推測される。

所見 時期は、重複関係と出土遺物から古墳時代後期から中世と考えられる。性格は不明である。



第28図 第4号溝跡・出土遺物実測図

第4号溝跡出土遺物観察表 (第28図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
67	土師器	高台付埴	-	(2.0)	[8.0]	赤石・石英・ 黒石・鉄屑	橙	普通	内面へう磨き 底面削り	底部余切り後高台貼り付け	覆土下層	5%
68	土師質土器	小皿	-	(2.1)	4.2	赤石・石英・ 黒石・鉄屑	橙	普通	体部内外面口ウロナデ	底部回転余切り	底面	50%

表7 その他の溝跡一覧表

番号	位置	方向	形状	規模				層土	主な出土遺物	備考 (時期・古・新)
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(m)			
3	A 110	N-79°-W	U字状	2.5	0.5-0.6	0.2-0.3	2-11	自然	-	
4	B307-B4c1	N-80°-W	U字状	18.3	0.3-0.8	0.1-0.3	15-34	自然	土師器 土師質土器 陶器	S12→本跡

(3) 土坑

時期及び性格を明確にできなかった土坑7基のうち1基について記述し、残りの6基については平面図と土層断面図で記載する。なお、いずれの土坑も第1号道路跡を掘り込んでおり、中世以降の構築と考えられる。

第5号土坑（第29図）

位置 調査2区中央部のB3d5区、標高29.9mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第2号溝跡と第1号道路跡を掘り込んでいる。

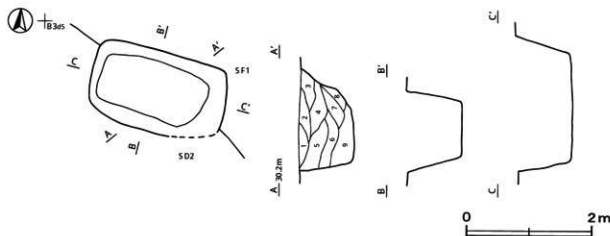
規模と形状 長軸2.2m、短軸1.3mの隅丸長方形で、深さは86cm、主軸方向はN-74°-Wである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 9層に分層される。ロームブロックを含む層が多いことや、不規則な堆積状況であることから人為堆積と考えられる。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子微量	6 暗褐色	ロームブロック中量
2 暗褐色	ロームブロック少量	7 褐色	ロームブロック中量
3 暗褐色	ローム粒子少量	8 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
4 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量	9 褐色	ロームブロック多量
5 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子微量		

所見 時期は、重複関係から中世以降の構築と考えられる。性格は不明である。



第29図 第5号土坑実測図

第4号土坑土層解説

1 黒褐色	ローム粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック微量
3 暗褐色	ロームブロック少量
4 暗褐色	ロームブロック中量

第6号土坑土層解説

1 黒褐色	ローム粒子微量
2 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
4 暗褐色	ロームブロック中量
5 暗褐色	ロームブロック微量
6 暗褐色	ロームブロック少量
7 暗褐色	ロームブロック多量

第7号土坑土層解説

1 暗褐色	ローム粒子少量
2 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量

第8号土坑土層解説

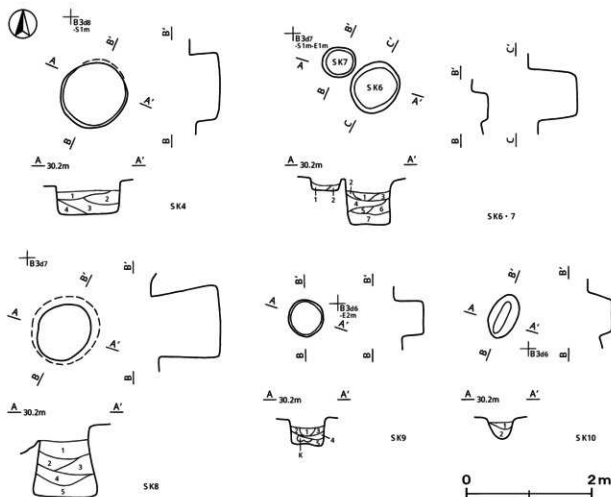
1 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック微量
3 暗褐色	ロームブロック少量
4 暗褐色	ロームブロック多量
5 暗褐色	ロームブロック中量

第9号土坑土層解説

1 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
2 暗褐色	ローム粒子少量
3 暗褐色	ロームブロック少量
4 黒褐色	ローム粒子微量
5 暗褐色	ロームブロック中量

第10号土坑土層解説

1 暗褐色	ローム粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック少量



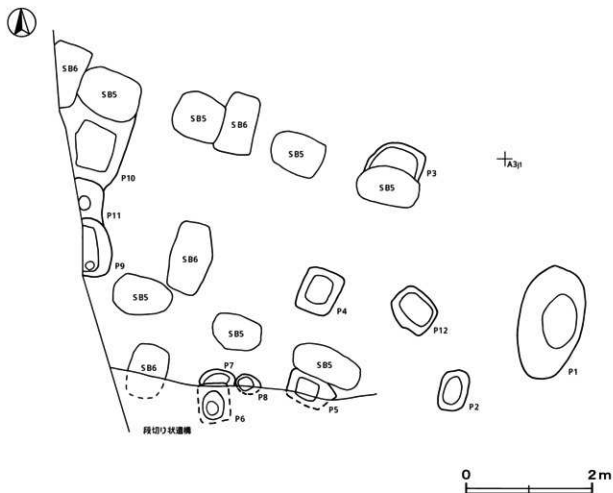
第30図 その他の土坑実測図

表8 その他の土坑一覧表

番号	位置	長(軸) 短(軸) 径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 (時期・否・別)
				長径(軸) × 短径(軸)(m)	深さ(cm)					
4	B348	-	円形	1.1 × 1.1	49	直立	平坦	人為	-	
5	B345	N-74°-W	楕円長方形	2.2 × 1.3	86	外傾	平坦	人為	-	
6	B347	N-50°-E	楕円形	0.9 × 0.7	73	直立	平坦	人為	-	
7	B347	-	円形	0.5 × 0.5	18	外傾	平坦	自然	-	
8	B347	N-27°-E	楕円形	1.0 × 0.8	103	内径	平坦	人為	-	
9	B346	-	円形	0.6 × 0.6	39	直立	平坦	人為	-	
10	B345	N-20°-E	楕円形	0.7 × 0.4	28	外傾	平坦	人為	-	

(4) ビット群

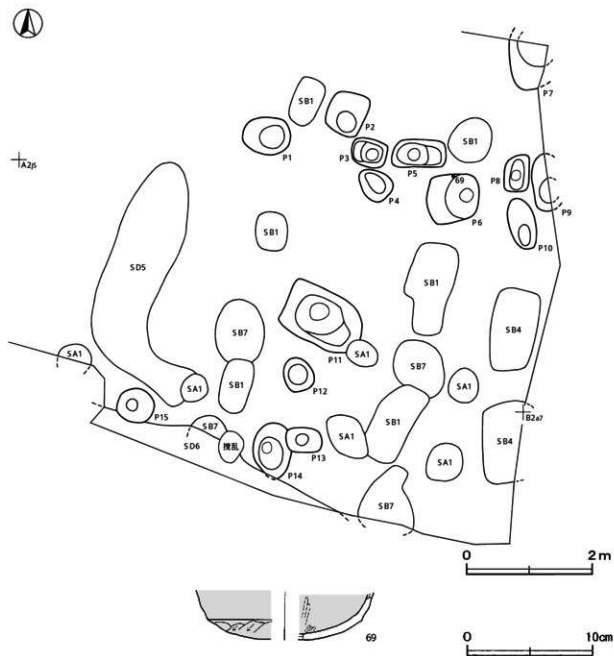
調査1区の東部と調査2区の西部で、第1・7号掘立柱建物跡及び第5・6号掘立柱建物跡と混在してビット群2か所が確認された。掘立柱建物跡や櫓跡の可能性を想定したが、ビットの配列に規則性が認められなかったことからビット群として扱った。以下、第1号ビット群及び第2号ビット群の平面図と規模をまとめた計測表を記載する。



第31図 第1号ビット群実測図

第1号ビット群計測表 (第31図)

番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
P 1	179	102	44	P 5	70	(50)	27	P 9	94	(48)	58
P 2	66	44	59	P 6	[63]	[50]	51	P 10	(120)	(102)	(23)
P 3	86	(40)	(30)	P 7	58	(30)	24	P 11	(60)	(43)	38
P 4	73	60	34	P 8	40	30	23	P 12	72	60	70



第32図 第2号ビット群・出土遺物実測図

第2号ビット群計測表 (第32図)

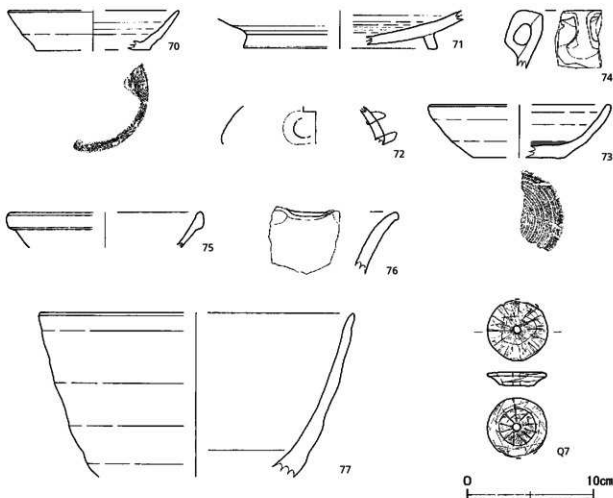
番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
P 1	76	60	52	P 6	83	78	47	P 11	130	85	71
P 2	70	60	36	P 7	(75)	(60)	47	P 12	55	46	28
P 3	57	44	46	P 8	59	39	58	P 13	58	39	39
P 4	58	46	22	P 9	91	(24)	91	P 14	90	62	47
P 5	86	44	79	P 10	83	41	58	P 15	60	54	33

第2号ピット群出土遺物観察表 (第32図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
69	土師器	杯	-	(3.8)	-	長石・石英・雲母・赤色粘土	にぶい橙	普通	体部外面下端へラ削り 内面へラ削り 赤彩	P 6中層	厚減強い10%

(5) 遺構外出土遺物 (第33図)

当遺跡から出土した遺構に伴わない主な遺物について、実測図と遺物観察表で記載する。



第33図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表 (第33図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
70	須恵器	杯	[13.4]	3.2	[9.0]	長石・石英	黄灰	普通	体部内外面横ナデ 底部回転へラ切り	1区	25%
71	須恵器	皿	-	(3.0)	[15.2]	長石・石英	灰白	普通	底部外面へラナデ 内面ナデ	2区	20%
72	須恵器	皿か	-	(3.0)	-	長石	灰	普通	注口部貼り付け後外面から穿孔	遺構確認部	5%
73	土師質土器	碗	[14.0]	4.2	[7.2]	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	体部内外面横ナデ 底部回転へラ切り 底部内面窪付着	1区	灯明皿に転用20%
74	土師質土器	内耳鍋	-	(4.5)	-	長石・石英	橙	普通	口縁部横ナデ 外面窪付着 耳は楕円形	2区	5%

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土・色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
75	鉢	磁器	(15.0)	(2.8)	-	灰白・明オリ	長石釉	白磁	親鳥陶磁	2区	5%
76	片口鉢	陶器	-	(4.9)	-	にがい黄橙・黄灰	自然釉	注口部焼み出し	常滑12c代	1区	5%
77	片口鉢	陶器	(24.8)	(13.0)	-	黄灰・焼灰	自然釉	口縁部は単純口縁	常滑12c代	1区	10%

番号	器種	径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q7	紡錘車	47	0.6	1.0	33.6	滑石	孔径0.6cm 表裏面ともに放射状及び円形の線刻	2区	PL3

第4節 ま と め

調査の結果、古墳時代中期の住居跡2軒、土坑2基、平安時代末から中世初頭の掘立柱建物跡5棟、堀跡1条、溝跡3条、道路跡1条、柵跡1列、中世の段切り状遺構1か所のほか、掘立柱建物跡2棟、溝跡2条、土坑7基、ビット群2か所が確認された。当遺跡はこれらの遺構から、古墳時代と平安時代末から中世にかけての複合遺跡であることが明らかになった。ここでは、検出された第1号堀跡を中心に若干の考察を試みたい。

1 第1号堀跡と鹿島町内No.20遺跡の大溝について

第1号堀跡は、今回の調査区を縦断するように調査区域の東端から西端にかけて長さ約110mが確認された。上幅約4m、下幅約3mほどの断面形が逆台形を呈する堀で、深さは最深部で約1.2mあり、底面が西に向かって傾斜している。調査区の西側は谷津に面する崖となっているため堀跡の西端は調査することができなかった。

この第1号堀跡には、調査1区東部に掘り残し部が確認されている。この掘り残し部は地山を掘り残して構築されており、この部分に掘立柱建物跡が3棟と柵跡1列及びビット群1か所が確認されていることから、堀を掘削する際に計画的に残したものと考えられる。掘り残し部の遺構のうち、第1・7号掘立柱建物跡の南北軸線は第1号堀跡の東西軸線と直交し、第1号柵跡の軸線も堀跡の東西軸線とはほぼ平行している。この軸線の関係から、掘立柱建物や柵は第1号堀跡が堀として機能している時期あるいは意識されていた時期に構築されたものであり、お互いに密接な関連性を持っていると考えられる。

当遺跡の北西約70mに、鹿島町内No.20遺跡（KT20遺跡）が位置している（第34図）。KT20遺跡は、昭和55年（1981年）に鹿島町（現鹿嶋市）教育委員会によって調査が行なわれ、大溝（第35図）、土器焼成の窯跡、炉跡などが確認されている¹⁾。大溝は、上幅4.8m、下幅2.5m、深さ1.1mで南北方向に検出され、方向はN-10°-Eで、第1号堀跡と直交する位置関係にある。底面の標高は29.8mで、底面は平坦で断面形は逆台形を呈し、壁は約40°の角度で外傾して立ち上がっているなど、当遺跡の第1号堀跡の形状と類似している。また、後述するが、出土した遺物にも共通点が見られる。以上のことから、当遺跡の第1号堀跡とKT20遺跡の大溝は同一の遺構と推測され、ある範囲を区画する堀としての役割を担っていた可能性がある。

2 土師質土器の小皿について

当遺跡からは、第1号堀跡も含め土師質土器の小皿が多くの遺構から出土している。検出された土師質土器の小皿は、大きく2つに分類できる（表9・第38図）。

A類は器高1～2cmと低く、口径7～8cmで薄手の造りであり、体部は直線状あるいはわずかに内彎して立ち上り、底部は回転糸切りされ、それ以外の部位は丁寧なナデ調整を行なっている形態である。さらにA

類は、高台をもたないもの（A類1種，31～33・59），高台をもつもの（A類2種，7・25・26・28～30），高台をもち焼成前に底部に穿孔されるもの（A類3種，35・36）に細分される。A類は第1号堀跡からの出土が多く，時期は堀跡から伴出した陶器片から12世紀代と考えられる。

B類は器高3～4cmとやや高く厚手の造りで，体部が直線状あるいはわずかに外反して立ち上り，体部のナデ調整は施されているが内外面にクロロ目を強く残す形態であり，底部に厚みをもつが高台は有しない。さらにB類も，口径7～8cmほどのもの（B類1種，52カ・63），口径10～13cmほどのもの（B類2種，19・27・44・58・61・64）の2つの法量に分けられる。B類は段切り状遺構からの出土が多く，時期は伴出した陶器片から16～17世紀と考えられる。

A類の1種と2種は，KT20遺跡から出土している土師質小皿と類似しており，KT20遺跡の大溝が平安時代末から中世に比定されていることから，当遺跡の第1号堀跡とKT20遺跡の大溝との強い関連性が想定される²⁾（第36図）。一方，B類の1種と2種は，鹿島城跡³⁾から出土している土師質皿（杯）と類似しており，時期は16世紀代に比定されている（第37図）。

また，第1号堀跡の土師質土器小皿の出土状況は，A類の土師質土器小皿が覆土中層から底面にかけて多く出土しているのに対し，B類の土師質土器小皿は少量で覆土中層から上層である。このことから，第1号堀跡は12世紀頃までその機能を有し，12世紀以降に埋没したと推測され，段切り状遺構が構築される16～17世紀頃には凹地として残存していたと考えられる。

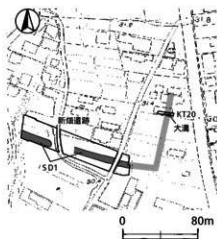
表9 新畑遺跡出土土師質土器小皿分類表

類別	A類			B類	
種別	1類	2類	3類	1類	2類
高台	なし	あり		なし	
		穿孔なし	穿孔あり		
口径	7～8cm			10～13cm	
器高	1～2cm			3～4cm	
体部	直線状又はわずかに内彎			直線状又はわずかに外反	
底部	凹縁糸切り 調整なし				
調整	体部及び底部内面にいないナデ			体部内外面ナデ 強いクロロ目を残す	
推定時期	12世紀代			16～17世紀	
主な出土遺跡	KT20遺跡 御園生遺跡 片岡遺跡			厨台遺跡 鹿島城跡	

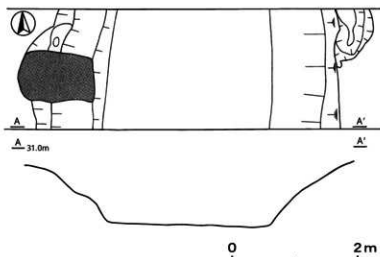
3 第1号堀跡の性格について

第1号堀跡は鹿島郡衙との関連も想定されたが，郡衙は10世紀には廃絶していることから，12世紀代に比定される本跡との直接的な関連性は低いと考えられる。しかし，大規模で計画的に構築された可能性の高い堀であることから，強い権力を持っていた有力者が堀の構築に関わっていたことは否定できない。

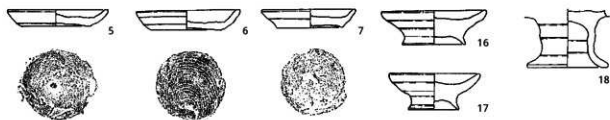
第1号堀跡の時期より新しくなるが，島名前野東遺跡では一辺約110mの堀が方形に巡ることや区内に掘立柱建物跡が確認されており，13世紀後葉から14世紀前葉の領主の居館跡と推測されている⁴⁾。この堀には，地山を掘り残された土橋も確認されている。また，屋代B遺跡では13世紀から14世紀の城館跡が確認されている。この城館跡は，3期にわたって造営・改修が行なわれて館から城郭へと変容するが，初期の頃は南側に虎口を持つ一辺80mほどの方形館である⁵⁾。当遺跡の第1号堀跡は，以上の2遺跡の様相から，KT20遺跡の大溝とともに，一辺が約110mほどの方形居館に伴う堀であり，調査1区の掘り残し部は土橋



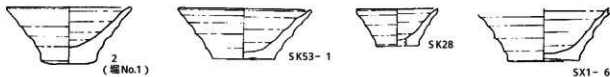
第34図 新畑遺跡，第1号掘跡，
KT 20遺跡大溝位置図



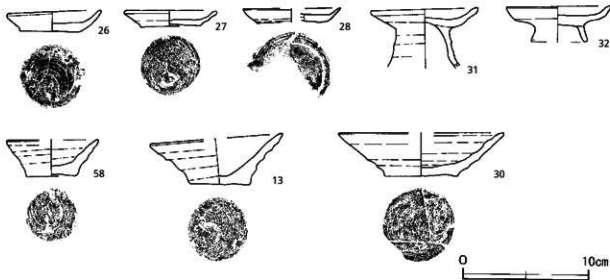
第35図 KT 20遺跡大溝実測図（「鹿島町内遺跡発掘調査報告書Ⅱ」より抜粋 一部改変再トレース）



第36図 KT 20遺跡出土 土師質小皿（「鹿島町内遺跡発掘調査報告書Ⅱ」より抜粋）



第37図 鹿島城跡出土 土師質皿（「鹿島城址Ⅴ」より抜粋）



第38図 新畑遺跡出土 土師質土器小皿・高台付小皿

である可能性がある。

12世紀に入り、吉田清幹の三男成幹が鹿島郡の地頭となり当地方を統治する⁶⁾が、それ以前にも現在の下埜地区周辺には在地の有力者が存在していたと考えられる。今回の調査では、鹿島氏を含む有力者と第1号堀跡との関連を明らかにすることはできなかったが、今後は、方形居館の様相とともに、平安時代末から中世初頭にかけての下埜地区の様相を解明することが課題になると考えられる。

註

- 1) 橋本久雄・本田勉・田口崇・黒沢正明・西井幸雄「鹿島町内遺跡発掘調査報告Ⅱ 鹿島郡衙推定地はか」『鹿島町の文化財』第17集 茨城県鹿島町教育委員会 1981年3月
- 2) 註1)に同じ
- 3) a 橋本久雄「鹿島城跡発掘調査報告書Ⅱ 鹿島城山公園整備事業に伴う発掘調査」『鹿島町の文化財』第34集 鹿島町遺跡保護調査会 1990年1月
b 田口崇・宮崎美和子・小田代昭九「鹿島町内遺跡発掘調査報告Ⅱ」『鹿島町の文化財』第70集 茨城県鹿島町教育委員会 1991年3月
c 岩松和光・糸川崇「鹿島城址Ⅴ 鹿島商工会館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査」『鹿島町の文化財』第108集 鹿嶋市文化スポーツ振興事業団 2000年3月
- 4) a 寺門千勝・田原康司・梅澤貴司「島名前野東遺跡 島名境松遺跡 谷田部漆遺跡 島名・福田坪一体型特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第191集 2002年3月
b 飯泉達司「島名前野東遺跡 島名・福田坪一体型特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第215集 2004年3月
- 5) 佐藤正好「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書17 屋代B遺跡Ⅲ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第45集 1988年3月
- 6) 飛田英世『鹿島中世回廊 古文書にたどる頼朝から家康への時代』鹿島町文化スポーツ振興事業団 1992年3月

参考文献

- ・石橋美和子・風間和秀「神野向遺跡 都市計画道路3・3・9須賀佐田線(鹿嶋市宮中地内)街路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書」『鹿嶋市の文化財』第117集 鹿嶋市文化スポーツ振興事業団 2005年3月
- ・茨城県史編纂委員会『茨城県史 中世編』茨城県 1986年3月
- ・田中信「武蔵の在地土器供養具 十世紀中頃～十四世紀の変化と画期」『中世東国の世界Ⅰ 北関東』高志書院 2003年12月

写 真 図 版



第1号掘跡(1区) 完掘状況(東から)

PL 1

調査区全景
(上が北)



第2号住居跡
完掘状況



第5・6号竪立柱建物跡
第1号ビット群
完掘状況



PL 2



第 1 号 土 坑
遺 物 出 土 状 況



第 1 号 堀 跡 (1 区)
遺 物 出 土 状 況
(北 東 か ら)



第 1 号 堀 跡 (2 区)
完 掘 状 況
(東 か ら)



第1号掘跡，第3号土坑，道橋外出土遺物

PL 4



第1号掘跡，第1号土坑出土遺物

茨城県教育財団文化財調査報告第BI集

新畑遺跡

都市計画道路須賀佐田線街路改良事業地内
埋蔵文化財調査報告書

平成20（2008）年3月19日 印刷
平成20（2008）年3月24日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL 029-225-6587

印刷 祐平電子印刷所
〒970-8024 いわき市平北白土字西ノ内13番地
TEL 0246-23-9051